

【小説】峰崎龍之介 【イラスト】馬克杯

2

ダンジョン

暮らしの



勇者

A former brave resident in the dungeon.

試し読み版

contents

A former brave resident in the dungeon.

story by minekaki ryunosuke and illustration by ecogop

一章	始まる新生活	006
二章	釣った魚に餌をあげよう	034
三章	帝国より来る者	066
四章	迎撃	106
五章	彼らの事情、アルの事情	136
六章	女は恥辱に溺れて	148
七章	男は屈辱に塗れて？	185
八章	皇女強奪隊、発足	202
九章	道中、馬車は揺れて	215
十章	マリー・ハーレンの憂鬱	233
十一章	淫らな獣たち	261
十二章	ミオン・レクト・ザヴァク	299
十三章	煙の街レムトール	313
番外編	女ふたり、待ちぼうけ	328



一章 始まる新生活

冷たい水で顔を洗うと、目の奥で凝っていた眠気が少し解けた気がした。

「……こんなものか」

フレデリカ・パームは呟き、用意しておいた手拭で顔の水気をさっと拭った。それから顔を洗うために桶に張っていた冷水を、壁際の溝に捨てる。溝は微妙に斜めになっているらしく、水を止めることなく部屋の外に運んでいった。

その行き先は、フレデリカにはわからない。なにせ彼女はここ——元魔王城たるダンジョンに住まう者として、一番の新人りだ。廃棄された水の行方など知りようもなかった。

（まあ、そもそもあまり興味もないが）

どうということのない気分で呟き、フレデリカは振り返った。そこには、壁一面と言ってもいいほど巨大な姿見が設えられている。キエト王国の大貴族、パー

ム家の息女たるフレデリカも、流石にこのサイズの鏡は見たことがなかった。

恐らく魔王城であった頃の名残なのだろうが、いくらなんでも大きすぎないかと、彼女は思っていた。

「よし……おかしいところはないな」

鏡を見つめ、確認するように呟く。鏡にはいつもと同じ姿が映りこんでいた。二十歳そこそこの、赤毛の女。どうということのない平服の上下を身に纏い、本来はつり目がちな目元をやや眠そうに歪めている。

（いかな。しゃっきりせねば。元よりそれほど、大した女でもないのだ）

鏡に映った自分に、戒めを投げつける。他人の意見を鵜呑みにするなら、こんな男女おとこめでもそれなりの美人ではあるらしいのだが——フレデリカはいまいち、その評価を信用していなかった。

王都にいた頃は眉が凛々しいねとか、泣き黒子がセクシーだねと言われていたが、その評価を主に下していたのは歳の離れた兄たちだったのだ。かなり身内びいきが入っているだろうと、フレデリカは睨んでいた。

「……顔立ち、か。わたしがまさか、こんなことを気にするようになるとはな」

ふと、彼女は苦笑した。王国騎士として職務に励んでいた頃は、自身の容姿など歯牙にもかけていなかった。それがいまは起床して顔を洗った途端に鏡の前に直行し、情けないことになっていないか確認している。その変化が、どこかおかしかったのだ。

「……まあ、色々あったからな」

数日前に自身に降りかかった災難を思い出し、フレデリカは苦い顔をした。上級騎士カトレア・リッケルを始めとした同僚たちからの嫌がらせと、このダンジョンのトラップによる陵辱の数々。いま思い出しても顔から火を噴きそうな記憶だ。

「……つと。いかな」

よくない方向に傾きかけた思考を、頭を振って散らす。それから彼女は、早足で扉の方に向かった。この部屋にはふたつ扉があるのだが、フレデリカが向かったのは出口——王座の間に繋がっている方だ。もうひとつは浴室に繋がっている。既に数回使わせてもらっ

たが、フレデリカの実家並みに豪華な浴室だった。

ともあれ、フレデリカは部屋を出た。元々決めていた予定通りに足を進める。向かう先はブラムの部屋だった。

「そろそろわたしも、タダ飯食らいは辛いからな」

早足で歩きながら、呟く。思い浮かべるのは、現在の彼女の境遇についてだ。

フレデリカは数日前の悶着の末、このダンジョンに留まることになった。ブラムの所有物——または部下としてだ。本来なら馬車馬の如く働かされていても不思議はない立場である。

だが彼がまず命じたのは、ここでの生活そのものに慣れろということだった。結果フレデリカは数日かけてこの場所——ダンジョンの住人にとつては生活スペースとなる二十五階層を、じつくり見て回っていた。

正直に言えば、最初の二日ほどはずっと驚きっぱなしだった。当たり前だが、ここは地上のどことも違う、ダンジョンの奥底だと思い知った。

まずそもそも太陽が見えない。時間を知りたければ

時計があるが、それが昼なのか夜なのかまではわからないのだ。一応、王座の間を照らしている魔法の光の強度から読み取れなくはないのが救いだ。

他に貴重な体験としては、数時間に一度はインプが目の前を横切ったり、新顔の存在を面白がって後頭部に蹴りを入れてきたりした。妙な愛嬌があるのでとりあえずは放っておいたが、しばらく続くようなら一度叩き落としてやるつもりだった。

また、このダンジョンは地の底に似つかわしくないほど高い水準の生活が可能なのもわかった。先ほど思考にのせた浴室もそうだし、異様に道具の揃った台所にも驚かされた。

(……とはいえ、な)

フレデリカは回想を閉じ、胸中で呟いた。新鮮な気持ちでいられた日々は、そう長くは続かなかったのだ。いかに広々としていても、数日ずつと見て回れば隔々まで把握できてしまう。結果フレデリカは、昨日あたりから暇を持て余し始めていた。

こんな朝っぱらからブラムを訪ねようとしているの

は、そのせいだった。昨日のうちに、ブラムと約束していたのだ。今日からフレデリカも、なにかしら仕事をさせてくれるようにと。

そんなことを考えているうちに、ブラムの部屋の前に到着した。フレデリカは少しだけ緊張しつつ、そつとノックをした。

だが返事がなかった。なので彼女は少しだけ強めに、何度かノックを繰り返した。だがやはり、部屋の中からの返事はなかった。

「むう。まだ寝ているのか」

フレデリカは唸り、腕組みをした。無理に起こすのは忍びない気がしたのだ。

「……おや？　そこにいるのはフレデリカさんかい？」

不意に背後から呼びかけられ、彼女は腕組みを解いた。声は朗らかな調子の、男性のものだ。

「その声……アルカノン殿か」

心当たりを口にしながら振り返った。視線の先では思った通り、黒いローブに身を包んだ金髪の青年が、

にこにこと笑って佇んでいる。整った顔立ちだが、どうも幼い雰囲気が付きまとう男だった。

魔導師、アルカノン・ロイゼ。かつて勇者ブラムを支えた仲間であり、魔王討伐の立役者のひとりだ。そして現在においては、このダンジョンを亡き魔王に代わって運営しているダンジョンマスターでもある。

「早いね。流石に騎士だっただけあって、生活が規則正しい。なによりだよ。どこかの寝ぼすけも見習えばいいのにね」

青年は小さく肩をすくめながら、そんなことを言ってきた。目線はフレデリカの背後、ブラムの部屋に向いている。

フレデリカはそれに、曖昧な笑みを浮かべた。返答に困ったわけではなかった。ただ、彼女の知るアルカノン・ロイゼと、目の前の彼とが上手く結びつかなかったのだ。

(……ザヴァクの麒麟児。魔道の全てに祝福された暗闇の御子。同じ世代だとは聞いていたが、このような優男だったとは)

偏見ではあるが、もっと卑屈そうな小男か、じめじめとした陰湿そうな人物を想像していた。だが数日前あの男に——ブラムに紹介された彼は、ご覧の通りのきらきらした美青年だった。その大きすぎるイメージのずれは、数日では修正できなかった。

なんにしろ——フレデリカは心を落ち着け、若き魔導師に向かって告げた。

「……仕方あるまいよ。ブラムは連日、ダンジョン内に『出勤』している。物見遊山程度にしか動いていないわたしでは、疲労の度合いが違うのだろう」

「まあ、彼が忙しいというのは否定できないかな。昨晚も夕食中に慌ただしく出ていったし」

「ああ。あれは『飯くらいゆっくり食わせろ殺すぞ』という顔だったな」

連絡係のインプの顔を驚掴みにし、悪態を吐きながらダンジョンに向かっていったブラムの顔は、こう言っただけなんだが悪鬼もかくやという怖ろしさだった。インプはまるでこたえた様子もなく、楽しそうだった。

「ま、それはともかく。こんな早朝から男の部屋の前で棒立ちなんて、朝駆けでもするつもりだった？　だとすると僕はとんだ間抜けってことになるから、早々に退散するけれど」

アルカノンが楽しげに告げてきた。軽妙な、しかしやや下品な軽口。

「いや、違う。単に用があっただけのこと。返事がないならそれまでだ」

残念ながら軽口に應じるだけの語彙がないので、フレデリカは素直に否定を口にした。

「あ、そうなの？　なんだ、残念」

なにが残念なのかは知らないが、彼はそう言って肩をすくめた。それから、すたすたと歩み寄ってくる。というか、フレデリカを追い越して扉のノブに手をかけてすらいた。

「どうせインプに叩き起こされてぶち切れるんだから、いま起こしたって構いやしないよ。鍵も開いてるし、入りなよ」

彼はあっさりそう言うのと、本当に扉を開けてしまっ

た。いくらダンジョンマスターとはいえ、それはいいのだろうか。

「じゃ、僕は一足先に朝食に向かうから。ふたりを起こしたら食堂に連れてきてね」

「ふたり？」

聞き返したが、その時にはアルカノンはひらひらと手を振り、立ち去り始めていた。

と、彼は一度だけ振り返り、告げてくる。

「ああそれと。起こす時は遠巻きにね。直接触るのは危ないから、お勧めしないよ」

彼は一方的にそれだけ告げると、止める間もなくすたすたと歩き去っていった。

「行ってしまったか。しかし……いいのだろうか」

阻むもののなくなった部屋の入り口をチラリと見て、フレデリカは呟く。部屋の主に許可を取らずに侵入するのは、なんだかんだで常識人なフレデリカには躊躇われる無作法だ。

（しかし……まあ、開いてしまったし。それに、あいつの寝顔は少しだけ興味があるしな……）

良心の疼きと好奇心を天秤にかけると、あっさりとは好奇心が勝った。フレデリカはどきどきしつつ、足音を殺して部屋に侵入した。



ブラムの部屋は、意外なことに散らかってはいなかった。というより、物がそもそも少ない。灰色の絨毯にテーブルと椅子のセット、魔法の品らしき照明。そして大きめの寝台。あるのは精々そんなものだった。なにか変わったものはないかと細部まで目を向けてみるが、テーブルにはなにも載っていないし、本の類も見当たらない。宛がわれた部屋をそのまま使っているような様子だ。

（薄々感じてはいたが、あいつはえらく無欲だな……）
思いながら、フレデリカはひとまず寝台に足を向けた。大人が四人は眠れそうな、立派な寝台。その真ん中に、シーツに包まれた膨らみがぼつんと鎮座している。よく見ると、はみ出た黒い頭も見えていた。ブラムの頭だろう。

フレデリカはその頭に向かって、やや控えめに声を

かけた。

「おーい、ブラム。朝だぞ」

その声に反応したか、シーツの膨らみまでもぞと動いた。だが、奇妙なことに黒い頭は微動だにしない。なんにしろ、ブラムはまだ目覚めていないようだなのでフレデリカは、少し声を大きくして再び呼びかける。

「おーい！ 朝だぞ！」

「……うるさいですね」

「へ？」

二度目の呼びかけに返ってきた声は、ブラムのものではなかった。それどころか男の声ですらない。涼やかな女の声だ。

フレデリカがぎょつとして一歩後ずさっていると、シーツの膨らみがのそのそと起き上がった。

「あ、え——イレネ殿!？」

起き上がったきたのは、銀色の髪と長い耳を持つ、ぞつとするほど美しい女だった。彼女はフレデリカの大声を歯牙にもかけず、眠そうに目元を擦った。

「なんの騒ぎですか？　まさか、こんな朝っぱらから侵入者がどうのなんて言わないですよ。これ以上この人をイラつかせると、流石の私も犯し殺されかねませんよ」

冗談なのか素なのかいまいちわからないことを言つて、女——イレエネはこちらに視線を向けてきた。それから、あらと小さく呟く。

「フレデリカさんでしたか。おはようございます」

言つて、彼女は小さく頭を下げた。すると、かううじて体に引つかかっていたシャツがはらりと落ちる。そして見えたものに、フレデリカはまた声をあげた。

「ちよ、イレエネ殿！　前、前がはだけているぞ！」

イレエネはなぜか裸だった。絵に描いたような美しい形の乳房が、お辞儀の動きに合わせてふるふると揺れている。同じ女ではあるが、思わずフレデリカは赤面した。

だがイレエネはまるで気にした様子もなく、淡々と告げてきた。

「ああ、朝食の時間なんですね。わざわざありがとうございますと

ございます。私たちだけだと昼前までろくに起きられないので」

「あ、いや……どういたしまして」

あまりにもイレエネが堂々としているので、フレデリカはとりあえずそれだけ答えた。それから、恐る恐る訊ねてみる。

「その、イレエネ殿。……なぜ、裸なのだ？」

言つてみてから、その間いがかかなり間抜けなものと気づいた。男の寝台で、女が裸でいる理由。そんなものはひとつしかない。

「なぜと言われましても。抱かれるのに服を着たままでは不便でしょう。まあ、そういうのが好きな方もいますが、ブラム様は特にそういう癖はありませんし」
イレエネは小首を傾げつつ言ってきた。伶俐な美貌にはそぐわない幼い仕草だが、彼女がやると不思議と愛嬌のある姿に見える。

まあなんにしろ、イレエネの返答は予想通りではあった。フレデリカはそれに、胸中で呟く。

（ただならぬ、という雰囲気ではあったが。……そう

か、やはりそういう関係か)

これもまた、予想していたことではある。ブラムとイレエネが、男女の関係にあるというのは。

というより、あの空気を見て気づけないのはよほどの阿呆だろう。そしてフレデリカは阿呆ではない。

(……なんだろう。予想していたのに、なんだか落ち込むな……)

もやもやした感情が胸中で渦巻くのを自覚する。だがそれを態度に出すのは憚られて、フレデリカは細く嘆息した。それから、一歩前に出た。膝立ちで寝台に上がり、ブラムを起こしにかかる。

とりあえず、元々の用件を済ませようという判断だった。と、その瞬間。

「あ。フレデリカさん、迂闊に近寄ると——」

「え？」

イレエネが忠告のようなものを投げってきたが、もう遅かった。フレデリカの手がブラムに触れかけた途端、これまで微動だにしていなかったブラムが、弾かれたように動き出した。驚いて硬直している間に、腕を取

られて引きずり倒される。

「え、ちょ、うわっ!？」

叫ぶが、どうにもならなかった。なにをどうされたのかもわからないまま腕の関節を極められ、フレデリカはうつ伏せの体勢からまったく身動きできなくなる。「死ね」

やや寝ぼけたような、しかし殺意だけは明確に感じられる声が降ってくる。フレデリカはぞわりと肌をあわ立たせた。

「——ストップです。彼女は敵ではありません。どう？」

反射的に目を瞑って身をすくませていると、危機感があるのかないのかわからないイレエネの声も聞こえた。

すると——

「……………」

ブラムは返事はしなかったが、とりあえず極めていたフレデリカの腕を解放した。

呆然としたまま、体だけ起こした。背中に刺さった

声の鋭さに、まだ肌があわ立っている。

「い、いまのは……?」

苦勞して声を絞り出す。だがブラムはまだきちんと目が覚めていないのか、頭をふらふらせている。結果、問いに答えてきたのはイレーネだった。

「この人、あらゆる能力値が戦闘に特化しているんですよ。なので不意に触れられると、寝ていても体が反応するんです。ほら、人を見ると吼える犬っているでしょう。あんな感じですよ」

「……そ、そうなのか」

そんな平穩な喩えで間に合う物騒さではなかった気がしたが、ひとまず頷く。と、そうこうしている間に、ブラムが意識を覚醒させた。

「……あん?　なんでフレデリカがここに……」

眩く彼の目はかなり眠そうだが、頭の揺れは止まっていた。

「起こしに来てくれたんですよ。ほら、しゃんとしてください」

イレーネが這い寄り、ぺしぺしとブラムの頬を叩い

た。彼は鬱陶しそうに目を細めたが、止める気はないらしく、されるがままだ。

「……………」

なんとなく。本当になんとなくだがそれを見ているのが辛くなってきた、フレデリカはのそのそと寝台を這い出た。

「……先に食堂に行く。わたしに仕事をくれる件を忘れないでくれよ」

言うだけ言って、フレデリカはブラムの部屋を出た。胸中に渦巻くもやもやとしたなにかは、ひとまず無視した。



「なにを怒ってるんだよ」

むつつりと黙り込んだままあとをついてくるフレデリカに、ブラムは振り返らないまま告げた。場所はダンジョンの地下六階層、中ほどのところである。

フレデリカはその言葉に、小さく『別に』とだけ答えてきた。その声に含まれていた不機嫌さに、ブラムは顔だけ振り返った。

「あのなあ。今朝の件なら謝つただろ。反射とはいえ
関節を極めたのは悪かつたてよ」

「だから、別に気にしていない」

フレデリカはそう言つて眉を寄せた。どう見ても
気にしている顔ではあつたが、本人がこうも頑固だど
うしようもない。

今朝起き抜けにあつた出来事のあと、フレデリカは
どうも様子が変わつた。氣になつて訊ねてみても、い
まのような反応しか返つてこない。

「つた、なんだつてんだ。イレ－ネも妙なこと言つ
てやつたし」

ブラムとフレデリカを転移魔法で送つてくれたイレ
－ネは、いまこの場にはいない。彼女はメイドとして
の仕事もあるのだ、今日はそちらに専念している。そ
の彼女がブラムたちを転移させる時に、小声でなにや
ら囁いてきたのだ。

『釣つた魚には、きちんと餌を与えてください。それ
が飼い主の責任でしょう？』

(……まあ、心当たりがないとは言わねえが)

思いながらも、ひとまずその件は思考から追ひ出
した。代わりに別のことを口にする。

「まあそれはいい。とりあえずは仕事の話だ」

「ああ」

フレデリカはこくりと頷いた。それを確認してから、
告げる。

「基本的な部分は、昨日だか一昨日だかに話したな。
このダンジョンを運営していくためには『負の魔力』
が必要で……俺たちが干上がつちまわないためには、
常にそれを集めてなきやならない」

「そうだな。それは聞いた。『ギグスの胃袋』だったか？
魔法の道具を使うのだろう」

フレデリカはすつと表情を引き締めて、答えてきた。
元が真面目な騎士だけあつて、仕事のこととなると切
り替えができる性質らしい。ブラムはそれに頷きかけ
つつ、懷から件の魔法の道具——『ギグスの胃袋』を
取り出した。

「そうだ。基本的には畏にかかった獲物にこいつを向
けて、負の魔力を失敬する。だが実のところ今回は、

罨とは別口のところからいたたくケースなんだが」

「そうなのか？」

ブラムは聞き返してくるフレデリカに、『ギグスの胃袋』を手渡した。彼女はおっかなびつくり受け取る。

「そうだな。具体的な説明をする前に、とりあえずお洩いするか」

ブラムは言つて、びつと指を一本立てた。

「第一に、このダンジョンには無数の魔物が巣を作り、好き勝手に生きている。それは君も知っているな？」

「ああ。魔王の加護を求めて、近隣どころか大陸中から集まつてきたのだろう。奴らは瘴気を好むから、魔王の近くは居心地がいいというのも理由だったか」

模範的な答えを口にして、フレデリカは歩くペースを上げてきた。並んで歩く形になる。それを横目で見ながら、ブラムは指を二本に増やした。

「じゃあ次だ。これは質問と言うよりクイズに近くなるが。……魔王が存命の頃といまと比べた時、このダンジョンの魔物の数はどう変化したと思う？」

「それは……減つただろうな。彼らも言わば、生きる

ために寄り集まつていたわけだし。魔王という絶対的な存在が消えた以上、留まるメリットも減つたわけだから」

フレデリカは迷いなく答えてきた。内容もしつかり的を射たものだ。

「流石にいいところのお嬢さんだ。ある程度は家庭教師にでも教わつたか？ ま、そういうことだ。現在のこのダンジョンは、罨に関してはかなり復旧している。だが同じように守りの要であつた魔物たちは、結構な数が外の世界に散つていった。俺が魔王をぶち殺したおかげで、盗掘屋どもは前にも増して深くまで潜つただろうからな。それまでに比べると、格段に危険な住処になつちまつたわけだ」

フレデリカは聞きながら、こくこくと頷いた。胸中でアルの受け売りだけどなと舌を出しつつ、ブラムは続けた。

「しかし、そこでまたひとつの変化が起きた。アルが最奥に辿り着き、ダンジョンコアの所有権を得た。この辺は魔法がらみで色々と難儀したらしいが……まあ、

それはいまは関係ないな。とにかく、ダンジョンは新たな主を得て再度稼働し始めたわけだ。するとどうなったか」

「……魔物がそれを嗅ぎつけて、戻ってきたと？」

フレデリカが先を引き取り、呟いた。訂正する部分もないので、頷いておく。

「そうだ。住むのに都合のいい……つまり、外敵^{にんげん}に襲

われにくい場所として、このダンジョンを再度評価し直したわけだ。だが、そこでちよいと面倒があつてな。出ていった連中がいれば、反対にここに残り続けている連中もいる。でもって、そうやって頑固に場所そのものに拘った連中が、出戻りの連中をどう思うかは……想像がつくよな」

「……快くは思わないだろうな。そこは人間も魔物も、大差ないということか」

納得したように、フレデリカは頷いた。それから、ふと顔を上げて訊ねてくる。

「それで……そのことと仕事と、どう関係するのだ？」

「それがな」

と、ブラムは苦笑を挟んだ。馬鹿馬鹿しいことだがと前置きしつつ、

「今回向かっている場所は、とある魔物が長いこと縄張りしている場所だな。そこに別の魔物が出戻りで紛れ込んだんだ。そして面倒なことに、そいつらはある一点において敵対する要素を持つていてな」

「……？」

ピンと来ないのか、フレデリカは首を傾げた。なんのヒントもないので無理もない。なのでブラムは、さつくりと結論を告げた。

「そいつらの共通点つてのはな、つまりどちらも男を誘惑する種の魔物だつてことなんだよ」

「誘惑……というと、淫魔^{サキユバズ}のような？」

フレデリカは性交に特化した悪魔の名を口にした。ブラムはそれに、小さく首を振る。

「いや、奴らは悪魔つてわけじゃない。単なる魔物さ。傍から見ても似たようなもんではあるがな。ただ、厳密に言えば男を誘う目的は種族によつて違う。……それはまあ、仕事には関係ないから割愛するか。なん

にしろ、こんな地の底でそんなもんを求めようとしたら、当然狙うものは決まってくるよな？」

試すように言うのと、フレデリカはうむと唸ってから、答えてきた。

「ああ、そういうことか。……どちらの種族も、限られたリソース……潜り込んでくる盗掘屋を捕らえてどうこうしたいわけだ。結果望みがバッティングして、争いになると」

「ピンと来たか。つまるところ今回の仕事ってのは、その魔物たちに捕らえられ、哀れにも搾り取られようとしている盗掘屋^{ばかじも}から、負の魔力を頂戴するってことだ。あとついでに、その魔物たちが喧嘩をこじらせないように……本格的に殺し合いを始めないようにするのも、一応仕事のうちではある。奴らだって貴重な防衛戦力ではあるわけだから、そんなもんで同士討ちされたらもったいねえし」

と、ブラムが投げやりに最後の説明を付け足した瞬間。ちょうど目的地に到着した。

そこは、六階層の最奥——つまり、七階層に続いて

いる階段のすぐ手前の部分だった。侵入者が七階層に至るためには必ず横切る、かなり広々とした空間である。

その真ん中あたりで、魔物の群れが対峙していた。

上半身は人間に近いものだが、下半身は蛇の特徴を持つ魔物の群れ。それがふたつの集団に分かれて睨み合っている。

「あれは……ナーガか？」

フレデリカが魔物の名前を口にした。あまり自信がなさそうな様子だ。実際に見るのは初めてなのかもしれない。ブラムはそれに、にやりと笑って答えた。

「惜しいな。それだと半分だけの正解だ。片方は確かにナーガの群れだが、対峙しているのはラミアの群れだ」

「ラミア？」

フレデリカが首を傾げた。無理もない反応だった。ナーガはともかく、ラミアは王国領だとほとんど見かけないからだ。

「ラミアってのは遠目にはナーガと大差ない、蛇の魔

物さ。まあ似てるだけで根本的なところではまったく別の生き物なんだが。……あと、実は見た目もよく見ると違う。ま、それは実際近づいてからで——」

そこでブラムは、ふと言葉を止めた。ナーガとラムアの群れの他に、なにか動くもの——人影が見えたからだ。

「……あれが今回の獲物だ、フレデリカ」

小声で囁きかけながら、ブラムはその人影を観察した。

見えたのは、三人の男たちだった。全員革製の鎧や小さな盾——バックラーを装備し、剣も持っているようだ。だが、それが役に立っているようには見えなかった。

男たちは、ナーガとラムアの群れの間に挟まれ、怯えた様子で尻餅をついていた。

「蛇に睨まれた蛙、つてところだな。いや、もう体半分くらいは飲まれてるか？」

「言っている場合ではないだろう。食われてしまったら負の魔力を回収できないぞ」

「ごもつともで。んじゃま、お仕事といきますかね。……とりあえず、今回は俺が交渉やらなにやらをやってみせる。君はよく見て、流れを掴んでおいてくれ」
「今日は見学、ということか。わかった。しっかり見させてもらう」

生真面目に頷くフレデリカに、小さく苦笑しつつ。ブラムは魔物たちの方に歩みを進めた。



「——ん？　なんだ、貴様らは」

ある程度近づいたところで、ブラムから見て右側の集団から声が上がった。ナーガ群のうちの一体である。険の籠もった声音だったが、彼女はブラムの姿を確認すると、おやと小さく呟いた。

「なんだ、ブラムかい。そうならそうと、声をかけておくれよ」

「……し、喋った？　いや、それよりも……ブラム、知り合いなのか？」

フレデリカがこつそりと言ってきた。ブラムは苦笑し、頷く。

「言葉が人間だけのものだと思うのは傲慢つてもんだぜフレデリカ。知能と声帯がありや、どんな種族だつて口を利くさ。あと、知り合いなのは当然だ。何度か盗掘屋しほりかすを受け取りに来てるからな」

肩をすくめつつ、ブラムはいつもの調子で軽く手を上げた。

「よう、ヘイル。今日も男漁りか。精が出るな」

「馬鹿をお言いでないよ。精を出すのはこいつらじゃないのさ」

ヘイル——このナーガ族の長——は、ふんと鼻を鳴らして告げた。同時に細長い舌が、唇からちろちろとはみ出ている。これはナーガの特徴のひとつだ。ぱつと見は人間そのものの上半身だが、所々に蛇の器官が備わっている。舌の他は目も蛇のものだし、肩のあたりには鱗もいくらかある。

そしてなによりわかりやすいのは下半身だ。腰あたりから下は、完全に蛇の姿だった。顔立ちは文句なく美女のそれだが、その部分が目に入れば誰でも魔物だとわかる特徴である。

とはいえ敵対せずに眺める分には、彼女らの容姿は美しいものではあった。背中を越えるほど長い黒髪は、人間の美女を探しても中々お目にかかれない艶がある。むき出しの乳房も実に形がよく、加えて大きさも中々のものだ。

「そりゃ失敬。——で、こいつはどういう騒ぎなんだ？ お仲間と餌を挟んで睨み合いつてな、穏やかじゃないが」

「仲間？ あいつらラミアとあたしらとが、仲間だつてのかい？」

ぎろりと、爬虫類の目でヘイルが睨みやつてくる。と、そこに。

「——おんしはなんじゃ。急に出てきて話の腰を折りおつて」

ラミアの群れの中から、一体が進み出て言ってきた。恐らくは、あの群れの頭だろう。

進み出てきたラミアは、シルエットだけはナーガ族と大差ないものだ。だがフレデリカにも言ったように、細部はかなり違っている。

まず舌はちろちろとはみ出たりしていないし、目も人間のものとまったく変わりない。肩にも鱗などはなかった。そしてなにより、彼女には股というべき部分が備わっているのだ。蛇の特徴は、太腿あたりから始まっている尻尾の部分くらいのもので、他は全て人間と大差ない形をしていた。

そしてやはりというか、顔はかなり整っている。間違いなく美女の類だろう。どこかの貴族だと言われれば頷いてしまいそうな黄金の髪と、男を誘ってやまない大きな乳房は、実に見事なものだった。しかもそれは個体による話ではなく、ラミア族は元々美しい金髪と豊かな乳房を持つて生まれてくる特徴があった。

「ま、また喋った……」

フレデリカが背後でうろたえているが、ブラムはひとまずそれを無視した。進み出てきたラミアに向かい、告げる。

「こういう場合、まず自分から名乗る方が円滑だぜ」

「……ふん。小僧が抜かしおる。まあよい、わっちは

イニス。こやつらの長じやよ」

イニスと名乗ったラミアは、背後のラミア族たちを示して告げてきた。ブラムは頷き、答える。

「あんたは新顔だな。俺はブラム。ブラム・デイルモンド。……あんたらには、『勇者』と言った方が通りがいいかもしれんがね」

「なんじゃと？」

イニスはなにを馬鹿なという顔をした。無理もない。彼女らが太樹と思い違った魔王を殺害した当の本人が魔王城に居座っているなどと、普通に考えるとない話ではある。

だがブラムが泰然と見返し続けていると、やがて眉を寄せて告げてきた。

「……本物なのかえ？」

「どうすりや信じる？　魔王をぶち殺した聖剣で、頸を落とされりや満足か？」

「……………」

イニスはしばらく黙り込んだ。そして、ヘイルの方に視線を投げる。ヘイルは無言で鼻を鳴らした。

このやりとりは、数週間前に彼女と交わしたものと同じだった。その時のことを思い出したのかもしれない。

なにしろ、その反応である程度信じることにしたのか、イニスは声の棘を落として告げてきた。

「……それで、その勇者がなんの用じゃ。これはわつちらとナーガどもとの話。……この殿方たちをどちらが迎えるかという、ただそれだけの話じゃ」

言つて、彼女は話の流れがわからない——あるいは恐怖で聞こえてもいない——盗掘屋たちを指差した。するとヘイルも、追従するように言ってくる。

「そうさ。別にあんたらに迷惑のかかる話じゃないだろう」

「ま、確かにそうだ。そこの盗人どもがどうなるのが、俺の知ったこっちゃねえ」

ブラムは気楽に頷いた。だが、直後にすつと目を細めもした。

「だがよ、ヘイル。以前言っておいたことがあるだろう。精を搾り取るだけ搾り取ったら、残りかすはこつ

ちに寄越せと。だつてのに、いまのあんたらの剣幕を見てると『こいつらに渡すくらいなら引き裂いてやる』って風にしか見えないぜ。俺が欲しているのは残りかすであつて、死体じゃねえぞ」

「どっちも変わらん気がするが……」

フレデリカがまたぼやいたが、無視した。一方イニスとヘイルは、それぞれ似たような表情を浮かべていた。つまりは、凶星を指された顔ということだが。

「やっぱりそういうノリだったか。……つたく、ちつたあ譲り合いの精神つてのを持てよ」

嘆息しつつブラムが言うと、ヘイルは鼻を鳴らした。

「はん。だつたらなおさら退けないね。あたしらはずつとここに住んでいたんだ。見苦しい出戻り女どもに譲るものなんて、なにひとつないね」

その言葉に、彼女の群れのナーガたちは『そーだそーだ！』と騒ぎ立てた。すると、イニスがぼつりと呟く。

「器の小さい女じやのう」

「ああ？　なんだって？　鱗もろくに生えてない半端

者が、意見するつてのかい!？」

「おーおー、つまらんことでよう吼えおるわ。蛇というより犬じゃの。少しはわっちらの淑やかさを見習つたらどうじゃ?」

ラムアの群れが、『ほんにそうじゃ』と追従した。

それを皮切りに、ふたつの種族は口々に罵倒やら皮肉やらを飛ばし始める。

「都合よく出戻つてきたくせに偉そうな!」

「頭の固い時代遅れどもが囁るでないわ!」

「死ねあばずれ!」

「なんじゃと淫売!」

女三人寄れば姦しいと人間界では言うが、魔物でもそれは変わらないらしい。しかもこれだけ集まると、もはや姦しいというレベルではなくなっていた。

「……………」

ブラムは無言でそれを見やると、すつと腰に手をやった。躊躇いなく聖剣を抜き、手近な壁に向けて叫ぶ。「光よ、穿て!」

瞬間、掲げた聖剣の切っ先から、夥しい光が発せら

れた。それは破壊力を伴った光の棘となって空を裂き、やがて壁に突き刺さると凄まじい轟音を立てて爆裂した。

『きゃああああああ!』

巻き起こった爆風と轟音、目を焼くような光の濁流に吞まれ、蛇女たちが一斉に悲鳴をあげてひっくり返る。なぜかフレデリカの悲鳴も混じっていたが、それはとりあえず無視した。

爆発のあとには、先ほどの姦しさが嘘のような静寂が舞い降りていた。その中でかちりと音を立てて納剣し、呟く。

「ごちゃごちゃ言うな。次に喧嘩始めたら、いまのを直接ぶち込むぞ」

『……はい』

あんまりにもあんまりな言いようだったが。

ひっくり返つた魔物たちは、とりあえずこいつには逆らわない方がいいと本能的に悟つたのか、消え入りそうな声でそう呟いた。

ブラムはそれに満足げに頷くと、さつと振り返つて

フレデリカに告げる。

「よっしゃ。とりあえず交渉の入り口には立てたぞ。いいかフレデリカ、交渉の基本はまず舐められないことから——つておい。どうした？」

振り返った先には、フレデリカの姿はなかった。と、ふと足元に、ふらふらと揺れる頭が見えた。

「……ブラム。次から無茶をする時は、まずわたしに教えてくれ……」

しゃがみ込んだフレデリカはぐつたりと頭を抱えながら、呻くようにそう言った。



「まあ、気を取り直して」

ひとりだけ元気なブラムは、ばんばんと手を叩いてそう言った。ぼちぼち回復し始めたヘイルとイニス、そしてフレデリカからは不満そうな視線が殺到するが、一切気にせず続ける。

「とにかく、あんたらが自分で喧嘩をやめられないなら、この場合は俺が仕切らせてもらう。いいな？」

「……ああ」

「……うむ」

ヘイルとイニスはまた不満そうだったが、とりあえず頷きはした。

と、その時だった。

「うわあああああああああ！」

叫び声が聞こえた。えらく悲痛な悲鳴である。つられて見やると、これまでろくに喋れてもいなかった盗掘屋のひとりが、必死の形相で走り出したところだった。彼は一直線に、ブラム目がけて走ってきている。

「あ、お前！」

「逃げるつもりかえ!？」

ヘイルとイニスが叫ぶが、男はどうか蛇女の群れの間をすり抜け、ブラムの目の前にまで到着した。

「た、助けてくれ！ 礼はする！ 今日の収穫を全部やつてもいい！」

収穫——つまりは、魔鉱石ということだ。盗掘屋同士が窮地に助け合うのは珍しいケースでもない。謝礼があるならもつと確実になる。

——もつともそれは、相手が盗掘屋であればの話だ

が。

「寝言は寝て言え、馬鹿たれが」

ブラムは呟いて、足元に縋り付こうとしていた男の足を払った。不意を打たれ、男は悲鳴をあげて転倒する。ブラムはうつ伏せに転んだその背中を容赦なく踏みつけた。

「ぐえっ。な、なにするんだよ！ 謝礼か？ 謝礼が足りないのか？」

男はじたばたと暴れて喚いた。が、ブラムはとりあえずそれを無視して——ついでに重心を変えて男を押さえつけて——ついと他のふたりの男に視線を向けた。（ふむ。連中の中じゃ、こいつが一番若いな。逆境で走り出せる胆力もある）

観察しつつ思考して、ひとり頷いた。それから、ことの成り行きを見守っていた蛇女たちに告げる。

「よし、こうしよう。この一番元氣な男はこれから行う勝負の結果によって、どちらかに引き渡すことにする」

「……勝負？」

と、これを訊いてきたのはフレデリカだった。だがそれは、ナーガ族やラミア族たちも同じ気持ちのようだった。疑問を隠せない顔で、一斉に首を傾げている。ついでに言えば、蛇女に挟まれているふたりの男は顔面蒼白だった……まあそれはどうでもいい。

「勝負の内容は簡単だ。そのふたりから、それぞれひとりを選べ。そしてそれぞれの方法で、精を搾り取るんだ。そうだな、回数は三回くらいでいいだろ。で、より早く達成した方の勝ちだ。簡単だろ？」

ブラムが説明すると、ヘイルとイニスはいちくりと瞬きしたあと、同時ににやりと笑った。

「なるほど、面白いね」

「ほほ。もらったも同然の勝負じゃな」

どうやら意図は伝わったらしく、ヘイルとイニスは氣絶している男ふたりのところに這い寄っていく。そして、それぞれ男を選び始めた。

「あたしらはこっちにしよう。いい無精ひげだ。濃いモノを溜めているはずさ」

ヘイルが言い、ひげ面の屈強そうな男を群れの方に

引きずっていった。男は引きつった悲鳴をあげたが、誰も聞いてはいなかった。

「ではわっちらはこちらを。細身じゃがよい筋肉よ。まぐわうにはいい案配じゃて」

続いてイニスも男を選び、ずるずると群れの方に引きずっていく。こちらにも悲痛な悲鳴をあげたがやはり聞いている者などいないので、虚しく響き渡るだけだ。（ふむ。自分で噓^{うそ}けといてなんだが、ひどい絵面だな）
眩^{くら}きながら改めて数えてみると、ナーガ族は全部で十二体、ラミア族は十体いた。その中に男がひとりきりで引きずり込まれていくのは、どこか捕食を思わせる光景だった。

「っと。忘れてた。服はまだ脱がすなよ。それも込みで勝負だからな。合図までちゃんと待てよ。ああそれと、この勝負の審判は俺がやる。だから俺から現場が見えるように場所を空けとけ。それから、一回射精させたらその都度申告すること。申告がない場合は問答無用で無効だからな」

ブラムの説明に、『はい』と同意の言葉が返って

くる。ご馳走を前にしているからか、どちらの種族も少し機嫌が回復しているようだ。

「なんだこれ……」

「ま、気持ちにはわかるがな。だが、これがこの日常だ。まともなことなんざひとつもねえ。早めに慣れた方が身のためだぜ」

「これに慣れたら、騎士どころか人として違うところに行ってしまう気がする……」

フレデリカがぼやく——と同時に、足元の男がまたじたばたと暴れた。

「ちくしょう！ なんなんだよあんた！　なんで魔物と仲よさそうなんだっ!？」

「うるせえ。別にあいつらとつるんでるわけじゃねえよ。単にお前らの敵なだけだ」

言いながら片足だけで、男の抵抗を封じる。そこでふと気づいた。

魔物たちが静かになり、じつとこちらの合図を待っていた。ブラムは視線をそちらに向け、深く息を吸い——声を張った。

「よし——始めろ！」

その合図と同時に。男に餓えた二種類の蛇女たちは、一斉に犠牲者を貪りにかかった。



「ひいひい!!」

「た、助けてくれー!!」

男たちが悲鳴をあげると、そのたびに革の鎧やらベルトやらインナーやらが、次々と放り出されて宙を舞った。十数秒も経つ頃には、男たちは見事に全裸にされていた。

「早いな。流石に常に男を襲っている種族だけある」
気楽に呟いていると、フレデリカが背後から歩み寄ってきて、問いを投げてきた。

「なあ、ブラム。奴らが精を求める理由がそれぞれ違うと、さっき言っていたが……具体的にはどう違うんだ？」

「なんだ、案外むつつりなのか？」

からかい混じりに言うのと、フレデリカはぐつたりと答えてきた。

「……なにも喋らずにあれを見ると、いよいよどうにかなりそうなんだ」

「は、なるほど。そんじゃまあ、気休めがてら話とするかね」

苦笑して、ブラムはまずナーガの群れの方を指差した。そこではひげ面の壮年の男が仰向けに寝かされ、男根をしゃぶられて仰け反っている。

「な、なんだこれ!! 長細いのがうごうごど……!」
ひげ面の男が引きつった声で喚いた。ナーガは細く長い、しかもかなり自在に動く舌を持つから、人間の口淫とはまったく違う感覚があるのだろう。雑に推測しながら、ブラムは口を開いた。

「見ての通り、ナーガの性技は口か手によるものがほとんどだ。まあこれは、体の特徴からしてそうなるようになってるんだが。いまは見えないが、彼女らの性器は人間とは違うところにあるらしい。具体的には、あの尻尾の真ん中あたりだな。しかもかなり小さい穴らしくて、人間の男根じゃろくに入らないそうだ」

「……? じゃあ、なんで子種など欲しがるんだ？」

フレデリカは順当に質問してきた。プラムは頷き、続ける。

「ナーガが精を求める理由は、一言で言うなら『美味いから』だそう。つまり、食料として精を求めているわけだ。……いや、主食ってわけじゃないから、『おやつ』と言う方が正確かもしれないな」

「お、おやつ？」

フレデリカは軽く身を引いて呟いた。と、その時。

「ぐ、ぐああああっ!? で、射精^でする！」

ひげ面の男が思い切り仰け反り、そんなことを叫んだ。すると男根をしゃぶっていたナーガ——どうやらヘイルのようだ——が、ちゅぽんと口を離して笑顔になる。

「ひっぱつめ！ もらったあ！」

彼女は口いっぱい白濁を頬張ったまま、実に満足そうな声で言ってきた。審判^{ブルム}に対する申告だろう。軽く手を上げて応じた。

「……な？ 美味そうな顔してるだろ。まあ味覚なんてそれぞれだしな。人間の中でも好みなんて千差万別

だ。彼女らが精の味を気に入ってるのにケチをつけるのは、不粋^{ふすい}でもんだろうさ」

「……そ、そうか」

頬を引きつらせて、フレデリカ。馴染みがない知識なので無理もないだろう。

プラムはその肩を叩きつつ、今度はラミアの群れに指を向けた。そちらもまた、蛇女による陵辱が進行中だった。ただしこちらはナーガとは違い、口での奉仕はしていない。彼女らには股が——人間に対応した性器があるので、それを使って精を搾ろうとしている。つまりは、単純にセックスを楽しんでいるということだが。

細身の男を犯しているラミア——イニス^{ちゅうてつ}は尻尾を使って腰を浮かせ、あるいは沈めて自在に抽挿^{ちゅうさく}している。股があつても開かない構造なので、能動的に犯すにはあの動きが最適なのだろう。

「うわあああつ！ こ、腰が勝手にっ」

細身の男が絶叫しながらじたと暴れた。というよりも、どうやら自分から突き上げ始めたようだが。

相手が魔物の女とわかっていても、射精の欲求には勝てなかったらしい。

「ああ……よいぞ、人間っ。ほれ、もつと腰を使って、わっちを楽しませい！」

かなりの勢いで突き上げられながらも、イニスは余裕の表情だった。それどころか自分からもさらに腰を振り下ろし、あるいは捻って男根を刺激している。

するともはや限界だったのか、細身の男が痙攣のように震えた。射精したのだろう。

イニスはぶるりと震えつつそれを堪能すると、すつと腰を上げた。するとその股から、ぽとぽとと白濁が垂れ落ちてくる。

「ふう、やはりまぐわいはいいのう。さて、これで一回目じゃ。審判、しかと見たか？」

満足げな表情で言ってくるイニスに、ブラムは軽く頷いた。

「ああ。だが急げよ。ナーガと十秒ほど差が開いてるぞ」

言うと、イニスはひくりと頬を引きつらせた。そし

て慌てて振り返り、群れの連中に次々かかれと命令を下した。男はもう射精^で精ないと泣き言を言ったが、ラミアたちに聞く耳はないようだった。

それを他人事の温度で眺めつつ、ブラムは説明の続きを口にした。

「で、ラミアの話だな。彼女らは見ての通り、人間に近い股——つまりは性器を持つている。でもって、感じる快楽も似たようなものだ。だが、多少似てるといつてもしよせんは別の生き物だから、孕むことは絶対にない。だからああやって、なんの心配もなく快楽だけを貪っているわけだ。言わば彼女らなりの娯楽……『遊び』だな」

「……………なんか、頭痛い」

フレデリカは呻き声を漏らし、表情もそれに倣って歪んだ。なまじ上半身は人間に見える上、言葉も通じる蛇女たちだ。つい人間の価値観で考えてしまったのだろう。

「ま、深くは考えんな。俺たちはただ、勝負の結果を受け止めて行動すればいい」

「……うーむ」

フレデリカはそれでも、難しい顔で呻いていたが、
どのみち彼女を納得させる時間はなかった。

「にはつめえ！」

「こっちもじゃー！」

蛇女たちはほぼ同時に、二回目の射精を宣言してき
た。いよいよ勝負も大詰めである。

「次に射精させた方が勝ちだ。気張れよー」

気のない応援など送ってみる。まあそんなものがない
くても、彼女らは一心不乱に男を犯しにかかっている
が。

だが、三回目の申告は中々こなかった。連続で射精
させられて、流石に男たちの男根も萎えているようだ。

と、ナーガの方で動きがあった。中々勃起しないの
に業を煮やしたか、群れの一体がひげ面の尻の穴に舌
をねじ込んだのだ。ナーガの舌は蛇に似て細いので、
それほど苦勞なく入り込んでいったようだ。

だがいくら細くとも、男が後ろの穴になにかをぶち
込まれたらどうなるかは——まあ言うまでもない。

「ぎゃあああああ!! うお、おおおおおおお!!」

ひげ面の男はびつくんびつくんと大仰にのた打ち回
ると、あっさりと勃起した。そのまま派手に白濁を迸
らせてすらいる。前立腺を舌先で刺激されたのかもしれない。

「よっしゃあ、三回目えー！」

「なんじゃと?！」

ヘイルの宣言にイニスが叫ぶが、もう遅かった。ブ
ラムはしつかり、ナーガ側が三回目の射精を促したの
を見ている。

「そこまでだな。——勝者、ナーガ陣営！」

言って、まだ踏んだままだった若い男の襟首を掴ん
だ。そのまま引つ張り上げ、無理矢理立たせる。

「んじゃ、早速賞品の贈呈だ。——受け取れ！」

ブラムは男の背中を思い切り押し、ナーガの方に突
き飛ばしてやった。

「え? あ、ちよつ。ちよつと待ってくれえええ!!」

男は喚いたが、急には止まれないようだ。その
ままぼすんと、待ち構えていたヘイルの胸に顔を埋め

る。

「ふふふいらつしやい。さああんたも、あたしらと愉
しいことしようねえ？」

「ひいひいひいひい！ い、いやだあ！ 助けてくれえ
ええええ……ええ……」

男の悲鳴は、殺到するナーガの群れの中に取り込ま
れ、段々小さくなっていった。それを確認してから、
ブラムはひとり頷く。

「よし。納品完了」

「鬼……」

フレデリカがなにか言つたが、ブラムは肩をすくめ
るだけで済ませた。

「フレデリカ。『ギグスの胃袋』を開けて、あのひげ
面に向けてみな」

「え？ あ、ああ。そういうえは預かつたままだつたな」
彼女は言つて、大の字で白目を剥いているひげ面の
男に近づいた。そして、持たせていた小箱——『ギグ
スの胃袋』の蓋を開ける。

すると男の体から、黒い靄ものようなものが立ち上つ

た。それはふわふわと空中を漂い、やがてフレデリカ
の持つ小箱の中に収まる。これこそがブラムが仕事と
して集めている、『負の魔力』である。

「量は……まあまあだな。ま、カトレアがむしろ異常
な量だったんだ。こればかりは仕方ないか」

フレデリカの手元を覗き込み、その肩を叩いた。

「この際だ。もう片方も君がやれ。いずれ俺の手が塞
がるような状況になったら、君にこういうことをして
もらうわけだからな。何事も経験するに限る」

「……なんだろう。なにもしていないのに、心が汚さ
れた気分だ」

ぶつくさ言いながらも、フレデリカは細身の男の方
に歩いていった。

と、そこに。

「……ぬう。ナーガ如きに遅れを取るとは……」

イニスが洪面で近寄つてきた。彼女は納得いかない、
という顔で言ってくる。

「審判。最後のは反則ではないのかえ。あれでは搾り
取るというより押し出す形ではないか」

「言葉遊びだろそりゃ。ケツにぶち込むなどは言つてねえぞ」

「そうじゃが……」

イニスはなおも納得いかないという顔だったが、途中でふと思いついたように手を鳴らした。それから猫撫で声で——蛇女が『猫』撫で声というのも奇妙だが——言ってくる。

「のうブラムとやら。お主もよく見れば、中々めんこいではないか。どうじゃ、一回くらい味わわせてくれんかのう？」

その提案に、ブラムはすつと目を細めた。美しい金髪を揺らし、大きな乳房を見せ付けて流し目を送ってくる——少なくとも上半身は——美女。なるほど魅力的なお誘いだ。

だがブラムは、乾いた声で呟いた。

「……そういや、蛇って焼いたら食えるよな」

「——あ、いまのなしで。うむ、冗談じゃよははは……」

イニスはざつと後ずさりながら呻いた。それを半

眼で追いかけると、イニスはだらだらと冷や汗を掻き始めた。そうなつてからようやく、ブラムは肩をすくめて嘆息した。

「……ま、出戻りとはいえ、あんたらをぞんざいに扱う気はねえよ。……そうだな。次がいい獲物が見つかったら、優先的に斡旋しよう。それで今回は手打ちだ。……いいな？」

「む、本当か？ なんじゃ、案外話がわかるではないか。うむ、今回はそれで手を打とう」

イニスは目を瞬かせたあと、あつさりと頷いた。交渉のごく基本的な部分……可能な譲歩は出し惜しまない。アルの受け売りではあるが、上手く機能したようだ。

と、そこでフレデリカが戻ってきた。それを確認して、ブラムは男を食るのに夢中なナーガたちに声をかけた。

「愉しむのは結構だが壊すなよ！ そいつにはまだ用がある。搾りかすはちゃんと、いつもの場所に提出するように！」

「あいよ」

「わかつてるよー」

「若いチンポ、やっぱ美味しいわねー」

ナーガたちはまばらに返事をした。一部ただの感想だったりもするが、理解しているならそれでいい。

「あの様子だと、しばらくかかりそうだな。ま、いいさ。この際近い階層を軽く見回ってこよう。戻ってき
た頃には、流石に搾り取られてるだろ」

「……うーん」

フレデリカはまだ慣れないのか小さく呻いていたが、
きつぱりと聞き流してやった。

二章 釣った魚に餌をあげよう

夕刻。ダンジョンの最奥にて。

「……疲れた」

フレデリカは自室に入るなり、ぐったりと愚痴を零した。そしてそのまま、ぼすんと寝台に身を投げる。思い出すのは、今日一日で『見学』した仕事の数々

——つまり、侵入者たちが陵辱される姿である。

本日の犠牲者は六階で蛇女たちに捕らえられていた例の三人組の盗掘屋の他、五階で壁の穴に上半身を吞まれて尻丸出しになっていた女がひとりと、同じく五階で擬態獣に下半身を犯されていた若い男、最後に七階にてオークに追いかけ回されていた女盗掘屋のふたり組といったラインナップだった。

ブラム曰く、『今日は女が多いな』という比率だったそうだが、正直フレデリカにしてみれば、別にどっちでもいい話だった。

（『ギグスの胃袋』が十全に機能を發揮するために、

ああいった陵辱が必要なのは説明を受けたが……なんともなあ）

呟く。やや陰鬱に。ここでブラムに尽くして生きていくと決めた彼女だが、流石にあんなものを連続で見せられては、ぐったりくるのは仕方なかった。元は清廉な騎士を志していた彼女なので、ああいう卑猥かつある意味むごい光景は、中々慣れるものではない。

（まあ、やるしかないだろうな。ブラムとて、元々は『勇者』……誇り高い戦士だったはずだ。それが平気な顔で職務に勤めているのだから、わたしが音をあげるわけにもいかない）

実際にはブラムが高潔であつた時期など一秒もないのだが、細かい事情を知らされていないフレデリカにはそれが真実だった。

（……よし。顔でも洗ってしゃきつとしよう）

フレデリカは気合を入れるように呟き、のそりと寝台から降りた。

と、その時。

「——フレデリカさん。部屋にいらっしやいますか？」

涼やかな女の声と丁寧なノックの音が、部屋に飛び込んできた。聞き覚えのある声——イレエネの声だ。

「ああ、いま開ける」

言つて扉を開けると、そこには予想通りイレエネがいた。今朝と違つて、きつちりとメイド服を着こなしている。彼女はさらさらの銀髪を揺らして会釈し、言つてくる。

「お仕事お疲れ様でした。これから湯浴みをしようと思つのですが、一緒にどうですか？」

「む。それはありがたいな。今日は随分歩き回つたからな」

匂いが気になるほどではないが、汗をかいた自覚はあつた。夕食の前にさっぱりできるのは、非常にありがたい。

「ちよつと待つてくれ。着替えを用意する」

フレデリカは衣装棚を適当に漁り、着替えを引つ張り出した。女ものの平服の上下と、下着とだ。

これはごく最近、ダンジョンマスターであるアルカノンが用意してくれたものだった。なんでも、定期的

に取引している行商人が複数いるらしく、たまたま最近取引した者がこれらを卸していたらしい。

イレエネはフレデリカの準備が整つたのを見て取ると、整然とした動作で振り返つて言つてきた。

「では行きましょう」

「うむ」

そうして女性ふたりは、揃つて浴場に向かつた。



(……やはりこの鏡は大きすぎるな)

浴場の手前の部屋で——今朝顔を洗つていた場所だ——汚れた服を脱ぎながら、フレデリカはぼんやりと呟いた。

壁に設えられた姿見が大きすぎて、部屋のどこで脱衣しても姿が映つてしまうのが、どうも氣になつていた。別に自身の裸体が見るも無残なものだと思つてゐるわけではない。ただ今回は比較対象が隣にいるため、どうにも複雑なのだ。

「……？　どうかされました？」

その比較対象が小首を傾げて言つてきた。既に下着

のみの姿になったイレエネである。

「……いや、なんでもない」

「そうですか」

イレエネは頓着せずに呟いて、静々と脱衣を進めた。最後の砦——下着が取り払われ、完全な裸体となる。

率直に言つて、美しい裸体だった。体つきそのものも素晴らしいが、肌の綺麗さはそれこそ人間離れしている。同性のフレデリカですら思わずはっと息を呑んだほどだ。正直これの横で裸になるのは、なにかの罰かと思えるほどである。

（……やめよう。考えると泣きそうになる）

ぐったりと呻き、無心で脱衣を終えた。それから、イレエネとともに浴場へ繋がっている扉を潜った。

そして——

「お、来たか」

「……………は？」

——なぜか浴場に突っ立っていたブラムの姿を見て、ぴしりと身をすくませた。

「あ…………え？　なんで!？」

一瞬の硬直から解放されたフレデリカは、かっと顔を赤くしながらイレエネの体の陰に隠れた。なにしろこちらは全裸だ。異性に見られて平気なわけがなかった。

まあ、もっとひどい場面を見られた経験もあったが——それはそれ、これはこれである。

「なんでもくそも、風呂入るんだろ。沸かさないと寒いだろうが」

と、彼は水の張られた浴槽を指差して——湯気がないのでお湯ではないようだ——よくわからないことを言った。すると見かねたのか、イレエネが説明してくる。

「ここは地下ですので、長時間火を使うわけにはいかないんですよ。なので風呂は、マスターかブラム様がいないと沸かせないんです。普段は概ねマスターの魔法で手早く沸かすんですが、今日はえらくお忙しいようでしたので、ブラム様に頼みました」

「た、頼みましたって……そういうのは、事前に言ってくれないと……。というか、ブラムが風呂を沸かす

ってどういふことだ……?」

フレデリカはぶつぶつと呟いたが、ブラムは聞いてもないようだった。肩などすくめつつ言ってくる。

「まあちよつと待つてろ。すぐ用意してやるから」

えらく軽い声だった。目の前に全裸の女がふたりいる状況を、さして気に留めていないようだ。

そして——次の瞬間、彼はなぜか腰の聖剣を引き抜いた。

「……ブ、ブラム? なにをしているんだ?」

浴場で服を着ているのも変だったが、剣を抜いた姿は輪をかけて異様だった。だが彼は頓着した様子もなく、淡々と呟く。

「光よ、滾れ」

その瞬間、聖剣が柔らかい燐光に包まれた。そして彼はその輝く聖剣を、おもむろに浴槽に突っ込んだ。すると——

じゅわっ、という、肉でも焼いているような音がした。同時にわつと湯気が立ち上つたりもした。無論、浴槽に突っ込まれた聖剣からである。それに、フレデ

リカはふと嫌な予想をしてしまった。

「……まさか。まさかとは思うが……。なあ、ブラム。それ……なにしているんだ?」

頼むから予想と違うことを言ってくれと思ひながら、告げる。

だが、現実とは常に非情なものである。

「なにつて、風呂沸かしてんだよ。聖剣の攻撃補助技——灼光刃シヤウコウジンを使つてな」

彼は気楽に言つて、広い浴槽の周囲をゆつくりと歩き回り始めた。聖剣で水を掻き回したりもしている。どうやら、温めた水を全体に行き渡らせようとしているようだ。

「……………」

フレデリカはその光景に、思わずその場に崩れ落ちた。裸を見られる羞恥も忘れ、頭を抱える。と、そんなことをしている間に。

「——よし。こんなもんだろ。あんまり熱いと体に悪いしな」

ブラムはお湯の温度に納得したのか、聖剣を引いた。

それから軽く水気を切つて、鞆に収めた。と、同時にこちらを見て言ってくる。

「どうした、フレデリカ。頭なんか抱えて。ん？ ああ、そうか」

ブラムはこちらの様子に首を傾げると、なにかを思いついたようにぼんと手を打った。

「安心しろ。聖剣は予め洗つてあるし、事前に灼光刃しゃっこうじんを使って高温消毒してある。衛生面はばっちりだ」

「……………」

フレデリカは返事をしなかった。無論、ブラムの言つたことが気になつたからではない。キエト王家の至宝たる聖剣が、風呂を沸かすのに使われている事実。それがあんまりにもあんまりだったので、立つていられなくなつただけだ。

——と、そうして言葉を失つていると。イレエネが足元の桶を取り上げつつ言つてきた。

「この際、ブラム様も一緒にどうですか？ また温めるのも手間でしょうし」

「ん？ ああ、まあそうだな。そうすつか」

彼は気楽に頷いて、すたすたと浴場から立ち去つていった。着替えを取りに、部屋に戻るつもりなのか。

——それをぼんやりとした思考に乗せた瞬間、フレデリカははつと気づいて顔を上げた。

「え、あ、ちょ……！ 一緒に入るつて、ブラムがか!!」

「ええ。なにか不都合があります？」

「そ、それは、イレエネ殿は問題ないだろうが……！」
今朝の悶着を思い出しつつ、呻くように言う。あからさまに男女の関係にあるふたりは一緒に入浴するなど茶飯事なのだろうが——こちらはそうもいかない。

「せ、せめてその、心の準備くらいさせてくれ！」

動揺して喚くと、イレエネは瞬きしつつ首を傾げた。
「それはつまり、準備が整えば肌を見せるのに否やはないということでしょう？ なら、遅いか早いかの違いがあるだけでは？」

「……え？」

フレデリカはわたわたと動かしていた手を止めた。言われてみれば、いまの発言はそう取れないこともな

い。彼女は慌てて、再び手を振った。

「い、いや！ 違うぞ、決して！ 別にあいつの腹筋割れてるのかなーとか、わたしのことはどう見えてい
るのかなーとか、まったく思っていないからな！」

「フレデリカさん。訊いてもいないことまで漏れてますよ」

「う、ぐ……」

言われて、フレデリカは呻いた。それに、イレエネは微笑した。

「……もつとお堅いお嬢様かと思いましたが、案外可愛らしいですね。そういうところ、もう少し彼にも見せてみたらどうです？」

「お、大きなお世話だ。……？ あれ？」

イレエネの言い方が気になり、ふと冷静になった。

「イレエネ殿、なぜそんなことを？ 貴殿はあいつの女なのだろう。こう言ってはなんだが……他の女など、寄せ付けたくないはずでは？」

気になったのはそこだった。まるでフレデリカを嚇けているように聞こえたのだ。

イレエネはそれに、すぐには答えず苦笑した。

「その問いに答えるのは吝かやぶさではありませんが……いつまでも裸で立っているのも間抜けです。まずは湯に浸かりましょう」

彼女は泰然と告げると、持っていた桶で浴槽の湯を掬った。そしてそれを、肩から浴びた。つまりは『かけ湯』である。それから桶をフレデリカに渡して、ゆつくりと湯の中に入っていた。

（……なんだろう。この溢れ出る余裕を見てみると、女としていかにも負けているという気になるな……）

思いつつも、フレデリカはイレエネに倣って『かけ湯』をし、浴槽に入った。ほどよい温度の湯に肩まで浸かる。じんわりと染み入ってくるような、いい湯だった。

「いい具合ですね」

「ああ……」

ふたりはしばらく、ほっと吐息して風呂を堪能していた。が、やがてイレエネが、ふと口を開く。

「それで……私と彼の関係の話でしたっけ」

「あ、ああ。その、イレレーネ殿の言いようだと、まるでわたしを嚇けているように聞こえてな。それがどうも引つかかるというか……不思議なのだ。あなたは奴を、独占したいとは思わないのか？」

改めて問うてみる。するとイレレーネは、ふっと微笑してみせた。

「そういう考え方では、あの人の相手なんてしてられませんよ。独占もなにも、いまの時点で手に余っていますから。むしろどうやって負担を減らすかを考えないと身がもちません。昨日も例の如く、ろくでもない目に遭いましたし」

イレレーネは言うど、美貌の中に困った表情を溶け込ませ、細く嘆息した。フレデリカは思わずその『ろくでもない目』を想像してしまい、ごくりと生唾を飲んだ。

「……ち、ちなみに。昨日は……なにをされたんだ？」
訊くとイレレーネは天井など見上げつつ、指折り数を数え始めた。

「まずお尻に筆を——」

「あ、やっぱいいい。ひとつ目でそれだと、わたしにはたぶん早い」

あっさり折れて、フレデリカは首を横に振った。イレレーネはそれに苦笑しつつ、言ってくる。

「もしもあなたが私に気を遣っているなら、それは取り越し苦労というものですよ。それに……少し真面目なことを言うなら、私が所持している『ブラム・ディルモンド』は半分だけです。同時に、彼が所持している私も、半分だけなんです」

「半分？」

よくわからず、聞き返す。イレレーネはまあ諭えですけどと呟きつつ、小さく顎を引いた。

「私たちは臆病で、全てを預け合うようなことはできないんです。だから、半分だけお互いを預け合っている。どれだけ体が欲に溺れても、もう半分の自分はずっと相手を見つめているんです。打算と肉欲。……それが、私と彼の関係の全てです」

そう語るイレレーネの顔は、どこか陰があるようにも見えた。あるいはそれは、単に気のせいだったのかも

しれない。元よりイレエネの美貌は、陰を背負った雰囲気纏ってもある。だが、少なくともこの瞬間のフレデリカは、イレエネがどこか寂しそうだと感じていた。

しかし、それを口にはしなかった。していいものだとも思えなかった。彼らの間には、フレデリカでは入り込めないなにかがある。そういうものに部外者が口を出すのは、筋が違ふ気がした。

そこでイレエネが小さく嘆息した。それから軽く頭を振り、言ってくる。

「……まあ、そういうわけですので。あなたがどうしようも、私はそれほど気にしませんよ。むしろ応援してもいいくらいです」

「いや、応援されても……」

「具体的には——このあと彼が戻ってきたら、背中なんか流してあげたらいいでしょうね」

「具体的に言われても」

「いきなり言い出すのが難しいなら、私がまず先陣を承りましょう。場を整えますので、あとから入ってき

てください。その流れでうっかりにナニを握れば満点ですね。合体待ったなしでしょう。あとは野となれ山となれ」

「あまつさえそんなこと言われても……」

本気か冗談かわかりにくいトーンに、とりあえず呻く。

その時だった。浴場の扉が開く音が聞こえ、続いてべたべたという足音が聞こえてくる。噂をすればなんとやら。ブラムが戻ってきたようだ。

そう間もないうちに、うっすらと視界を覆っている湯気を掻き分け、ブラムが姿を見せた。無論、完全に裸体である。そしてこれも当然だが、話に出ていたナニもしっかり見えている。

フレデリカはそこまでまじまじ見てしまつてから、風呂の温度以外の要素で顔を赤くしつつ、呟いた。

「……うっかりに握る……」

「……なんの話だ？」

ブラムは不思議そうな顔で首を傾げていたが。当然ながら、誰もその疑問には答えなかった。



(……なんなんだ、あいつ)

肩まで湯に浸かり、ぼんやりと天井を見上げつつ。

ブラムはこっそりと嘆息した。ちらりと視線を転じると、フレデリカがやや距離を隔てて座っている。だがどうも様子が妙だった。有り体に言って挙動不審である。

ちらちらとこちらを見てくるわりに、目が合うとぎぶんと湯に潜って隠れるのだ。ちようどいまも、不意に視線が絡むと湯の中に逃げていった。子供か君はと胸中で突っ込みつつ、ブラムはまた視線を転じた。

「……イレエネ。あいつ、どうしたんだ。飼い主に殴られた犬みたいになってんぞ」

すぐ隣にいるイレエネに問いを投げる。だが彼女はそ知らぬ顔で髪を弄りながら言ってきた。

「さて。私にはわかりかねます」

実に平然とした声音だった——ブラムは知っていた。彼女が無駄に髪を弄っている時は、概ね嘘を吐いている時だ。

「……まあ、いいけどよ」

とりあえずそう呟いて、ブラムは肩をすくめた。もうひとつ知っていることがあったからだ。

(こういう時の彼女は、いくら追及しようがのらりくらりだ。俺の舌じゃ追いきれねえ)

思いながら立ち上がった。数分は湯に浸かっている。長風呂は趣味ではないので、さっさと体を洗って立ち去るつもりだった。

だが——

「あら、もう出るんですか？ では、背中を流しましょう」

浴槽から出たところで、そんなことを言われた。振り返って見やると、彼女はブラムと同じに浴槽から出たところだった。それにふと眉を眉を寄せる。

イレエネがブラムの背中を流すのは、実はそれほど珍しいことではない。だがいつもは、わざわざ口に出したりはしなかった。勝手に背後に回ってきて、勝手にことを始めてくるのだ。なのに彼女は、ことさら声を張ってまで意思表示をした。それがどうにも引つか

かった。

しかしいまさら聞き返すのも野暮な気がして、ブラムは口を噤んだ。

(……まあ、いいか。とりあえず泳がせてみよう)

肩をすくめて歩き出す。向かう先は浴槽から少し離れた一画だった。体を洗うための器具や溶剤が、纏めてそこに置かれていた。

ブラムはいつものように、背もたれのない小さな椅子を引き寄せてそこに腰を降ろした。するとイレエネは壁際に置かれていた容器——体を洗うための溶剤が入っている——を取り上げて、ブラムの背後に回った。これもいつものことで、彼女はブラムの体を洗う時、最初は手拭の類を使わない。溶剤を自分の体に塗して、抱きつくようにして擦ってくるのが通例だった。

「では、ご堪能ください」

案の定、イレエネは背後からそっと体を密着させてきた。くにゆりと、背中では乳房が押し潰される感覚がある。湯に浸かっていたためか、彼女の体は心地いい温度だった。そして心地いいのはそれだけでもない。

彼女が体に塗している溶剤は、かなり粘性の強い液体なのだ。それが彼女のきめ細かい肌によって塗り広げられる感覚は、率直に言ってかなり卑猥なものだった。

「……いつも思うんだが。こいつはどうも、誘われてるって気しかしねえな」

「ええ。だって誘っていますから」

軽口も、平然と切り返される。ブラムは苦笑して、背中に感じる甘美な感触を味わった。

このやり方の最も卑猥なところは、実のところここからだった。溶剤で滑りがいいとはいえ、乳房を何度も擦りつけていけば、彼女自身にも相応の刺激が跳ね返る。つまり、気分が出てきてしまうのだ。

いまでもそうだ。柔らかな乳房の感触に、少しずつ硬い感触が混じり始めている。

「ん……ふ……」

頭のすぐ後ろから、甘い声が聞こえてくる。元より敏感なイレエネだ。こうなるのはわかっていたはずだ。それでもやめるつもりがないということは、まあそう

いうことなのだろうが。

「あ……んん……」

背中に感じる硬い蕾の感触は、いよいよ明確になっていた。もう勃起していると言っても文句は出まい。そしてその頃には、ブラムの方も『その気』になつてきている。聞き分けのないムスコが顔を上げ始めている。

「……あら、今日は随分早起きですね」

イレエネが動くのをやめて、手を伸ばしてきた。勃起し始めている男根を、そつと指先で撫でてくる。それからややわやわと握り、軽く上下に動かしてきた。乳房の感触と相まつて、男根はあつさりと臨戦状態にまで誘い込まれる。

「仕方のない人ですね。もうこんなにして」

「誘つたのは君だろ。責任は取ってくれるんだよね？」

苦笑して告げる。するとイレエネは、耳元でそつと囁いてきた。

「そうしても構いませんが……今日は少し疲れていますので。助っ人を呼ぶことにします」

彼女は言うのと、すつと体を離れた。それから声を張る。

「フレデリカさん。ちよつといいですか？」

「は、はひ!!」

と、浴槽の方ではしゃんと飛沫が上がった。フレデリカがすつ転んだせいらしい。彼女は溺れているんじゃないかとうかど心配になるような動きで、しかしどうにか浴槽から上がってきた。

「な、なんだイレエネ殿」

近くまで寄つてきたフレデリカが、どもりながら言う。イレエネは例の溶剤が入った容器を差し出しつつ、告げた。

「ひとりだと大変なので、手伝ってください。それを体に塗つて、前から彼の体を洗っていただければ結構ですのぞ」

「わ、わかった。手伝いだからな。仕方ないな!」

フレデリカはぶつぶつ言っていたが、結局溶剤を体に塗り始めたようだった。その間に、イレエネが告げてくる。

「ここからはふたりがかりです。座ったままだと動きにくいので、立ち上がってください」

手を引かれ、とりあえずブラムは立ち上がった。すると妙にぎくしゃくした動きのフレデリカが、前に回ってくる。

「……そ、そんなにじろじろ見るな」

フレデリカはいまさらながら、さっと乳房と股間を隠した。だがここまできて目を逸らしてやるほど、ブラムは紳士的ではない。

何度も浴槽の中に潜ったりしていたせいか、彼女の燃えるような赤い髪はさぶ濡れだった。加えて言えば、瞳もどこか濡れて見える。つまり、恥ずかしさのあまりちよつと泣きそうだった。

さらに言えば、体がぶるぶると震えてもいる。乳房はそれほど大きくないものの、その震えに合わせて動く程度には存在を主張していた。ぬるぬるの溶剤が塗されていることもあって、かなり卑猥な状態だった。

まあなんにしろ。フレデリカは、どうやら物凄く恥ずかしがっているようだった。

「……あのよ。震えるほど恥ずかしいなら、やめてもいいぞ」

「い、いや！ 大丈夫だ！」

フレデリカはやけくそのように叫び、ずいと距離を詰めてきた。そのまま一気に抱きつこうとして、ふと意気地が挫けたように動きを止めた。

「……ま、まずは手から……」

しおしおと勢いをなくし、彼女はそつと手を伸ばしてきた。

「や、やっぱり腹筋は割れてるんだな……」

よくわからないところに食いつきながら、指先で腹に触れてくる。ブラムは肩をすくめた。

「腹のたるんだ『勇者』じゃ、いくらなんでも格好つかねえだろ」

「……そうだな」

フレデリカはくすりと笑った。少しだが緊張が解れたようでもある。彼女はそのまま、ブラムの脇腹に触れ——む、と小さく咬いた。

「ここ……傷があるな。いや、他にもたくさんあるが、

これだけ妙にはつきりと見える」

(……げ)

ブラムは内心でだけ呻いた。よりもよってそこに注目するのによ。

「お前がこれほどの傷を負うとは、よほどの強敵だったのだろうか。……もしや、これは魔王に？」

「……そんなところだ」

いや、それは君の親父が『訓練』の時出力を間違えて、ガチで死にかけた時の傷だ——無論、そんなどうしようもない真実など言えるはずもない。ブラムは苦勞して誤魔化した。

——と、そこにイレエネが割り込んできた。

「そろそろ始めましょう。これで風邪でも引いたら大間抜けですよ」

「む、そうだな」

フレデリカは言うど、おずおずとだが体を寄せてきた。体の前面がびたりと合さる。そうなれば無論、男根もまたフレデリカの体に触れることになる。いまはちようど、フレデリカの腹にぐりぐりと押し当てら

れている。

裏筋が腹に撫でられているような按配だった。イレエネほど極端なものでもないが、フレデリカの肌もかなり綺麗なので、中々甘美な刺激が男根から伝わってきている。

「……す、凄いな。こんなに、硬くなるのか……」

「もつと硬くなりますよ。この人、二回目からが本領発揮なので」

言いながら、イレエネが迷いなく体を密着させてくる。結果ブラムは、女体にサンドイッチにされるといふ、奇怪な状態に陥っていた。

その状態はしばらくの間続いた。するとブラムは、段々この刺激では物足りないと感じ始めた。仕方のないことではあった。フレデリカの肌は心地いいが、いかんせん刺激としては弱い。

「——そろそろ、射精したいですか？」

イレエネが小声で囁いてきた。何度も交わっているからか、そのあたりの呼吸は弁えていらしい。

「そうだな。ぼちぼち理性が駄目になり始めてる。あ

まり焦らされると、ふたりとも押し倒しかねないぜ」
「それは大変。では、そうなる前に手を打ちましようか。……フレデリカさん。ちょっと失礼しますよ」

イレレーネは言うど、ブラムとフレデリカの体の間に手を差し込んだ。そして男根の根元をそつと握る。彼女はそのまま、根元から真ん中あたりまでを上下に擦り始めた。

刺激が強まり、男根が反応する。それが伝わったのか、フレデリカもまたびくりと肩を震わせた。

「あ、いま……お腹を叩かれた？ わ、わたしのお腹、気持ちいいのか？」

「その言い方だと、俺がとてつもなくニッチな変態のように聞こえるな。……ま、心地いいのは否定しねえけど」

言つて、フレデリカの背中に手を回した。そのまま抱き寄せる。よりいっそう、密着が強くなった。するとイレレーネが心得たようなタイミングで、男根を強く抜き始める。

根元から真ん中をイレレーネに抜かれ、先端付近の裏

筋と亀頭はフレデリカの腹に擦り付けている——異様な状況だったが、悪くない官能だった。

「射精るぞ」

呟き、射精した。フレデリカの白い腹にどくどくと勢いよく、白濁をぶちまけていく。

今日最初の射精だからか、かなりの量が出た。

「あ……凄い、びくびくつて……」

フレデリカが呆けたように呟くのを聞きながら、ブラムは彼女を抱いていた腕を解いた。

洗体用の溶剤に塗れていたところに白濁が重なり、彼女の体はひどく卑猥な状態にあった。よく見ると、いつの間にか乳首が勃つてもいる。あるいは、この異様な状況に昂り^{たかぶ}を覚えているのかもしれない。

そしてそれは、ブラムとて同じだった。

「……フレデリカ」

呟き、一歩進む。イレレーネはいつの間にか背中から離れていた。邪魔をしない配慮だろう。こういうことにはとことん優秀な女である。

「……あのよ。ここまでしていまさら言うのよな

んだが。俺はいま、かなり昂ってる。正直、もう押し倒しちまおうかなとすら思ってるところだ」

「……………」

フレデリカは無言だった。ブラムは構わず、続けた。

「だが、君は俺の部下でもある。それを無理矢理犯すつてのは、どうにも気が乗らん。だから問う。君は俺に抱かれても平気か？ 元は敵の男に体を許せるか？ 嫌なら嫌と言っている。首を横に振ったからといって、君をここから追い出したりはしない。それを踏まえて……………よく考えてくれ」

「……………本当にいまさらだな」

フレデリカは呟いて、苦笑した。

「お前はあの時、『俺のものになれ』と言っただろう。そしてわたしはそれに、頷いた。……………頷いたんだ」

フレデリカはブラムの手を取り、続けた。

「……………だから、いいんだ。わたしを……………ちゃんとお前のものにしてくれ」



「……………だから、いいんだ。わたしを……………ちゃんとお前

のものにしてくれ」

覚悟はある——そういう雰囲気を纏ったフレデリカの言葉を聞いて、ブラムはゆっくりと手を伸ばした。

「……………言ったな。もう引き返せねえぞ」

呟いて、そっとフレデリカの体を抱き寄せた。そのまま口づける。

彼女はわずかに身を硬くしたが——抵抗はなかった。重ねるだけの口づけを数秒続けた。一度顔を離し、ブラムはフレデリカの瞳を覗き込んだ。

濡れた瞳。勘違いでなければ、すっかりその気になっている。それを確認して、ブラムはもう一度唇を重ねにいった。今度は舌を出し、挑発するように下唇を舐めてやる。フレデリカはぴくりと肩を震わせたが、やはり抵抗はしない。

「ん……………ふあ……………」

舌が絡んだ。唾液が混ざる。顎を掴んで逃がさないようにしながら、それを吸った。

するとフレデリカの体から、徐々に力が抜けてくる。感じているのかもしれない。

彼女はやがて、立つていられなくなった。ぺたんと床に座り込む。

「おいおい。前戯で腰を抜かすなよ」

言いつつも、悪い気はしないがと苦笑する。

フレデリカは唇を指で撫でながら、ぼそりと呟いた。

「……凄い、な。男女の睦みは、こういうものなのか……」

その呟きに、ブラムはふと違和感を覚えた。この口ぶりだと、まるで――

「――野暮なことを訊くが……。もしかして、経験がないのか？」

「……………」

フレデリカはそれに、もごもごと口を蠢かせた。が、やがて観念したようにこくりと頷く。

「……マジか」

どうやら彼女はまだ生娘らしい。つまり彼女は、まったく免疫がないままダンジョンのトラップに陵辱され、カトレアの嫌がらせに晒されていたということになる。

（……そりや、処女があんな目に遭えばきついわな）
頬を掻きながら胸中で呻く。それから屈み込み、告げた。

「いまからでも場所を移すか？　初めてがここの床じや、流石に味気ないだろ」

ことを始めてしまえば、こういう気遣いもできなくなる。ゆえに事前に提案したのだが、フレデリカは首を横に振った。

「……いや、いい。……白状すると、いまの時点ですり切りいっぱいだ。仕切り直したら、たぶんわたしは逃げる。だから……」

言いながら、フレデリカは顔を真っ赤にしながら仰向けに横たわり、そつと足を開いた。しつとりと濡れた赤い恥毛と、秘めやかに閉じた秘所とが晒される。テクテカと光沢を放っているのは、洗体の溶液に塗れていることもあるだろうが――まあ、それだけでもあるまい。

その卑猥な姿を見つめて、ブラムは呟いた。

「君がそう言うなら、止めはしないがな。……俺もい

い加減、我慢が利かなくなつてることだしよ」

ブラムはフレデリカの腰を掴み、引き寄せた。そして一度射精したにもかかわらず、またガチガチに勃起している男根を秘所に押し当てる。フレデリカはびくりと腰を震わせた。

「わかるか？　これがいまから君の膣内^{なか}に入る。個人差はあるらしいが……たぶん痛いだろうな。言つとくが、入れちまつたら男はただのケダモノだ。覚悟はしてくれ」

「……だ、大丈夫だ。やつてくれ」

どう見ても強がりだったが、指摘するのは野暮だった。ブラムは小さく苦笑して、ゆつくりと腰を進めた。フレデリカの膣口は、やや小さめのように思えた。それに張り詰めた亀頭が押し入っていく。そしてそこまでいけば、挿入の完遂は目の前だ。いよいよ、破瓜の時である。

「いくぞ」

一思いに貫く方が、まだマシだろう——思いながら、一気に腰を進めた。ほんの少し進んだ段階で、ぶつり

となにかを引き裂く感覚があつた。そしてその瞬間。

「いっ——。っう……!!」

くしゃりと、フレデリカの表情が歪んだ。やはり痛かつたらしい。

だが、こちらもそれどころではなかった。痛みに反応したのか、フレデリカの膣内^{なか}が強烈な締めりを発揮したのだ。しかも経験がないだけあつて、その締めりは無秩序で容赦がない。率直に言つて、心地いい感触だった。

また生娘を貰いたという事実は、精神的な官能をも生んでいた。目の前の女——穢れを持たなかったはずの処女。それを汚してやったという征服感があつた。無論、こんなものは錯覚だ。わかつていたが、腹の底には熱が生まれていた。このまま犯せという衝動。白濁で子宮を染めてやれという獣性。苦勞して飲み下した。

挿入したら男はケダモノ——そうは言つたが、流石にあまりにも辛そうなフレデリカに、いくばくかの理性が働いていた。

「大丈夫……ではなさそうだな」

気を抜くと遮二無二腰をぶち込んでしまいそうなのを堪え、告げる。フレデリカは口をばくばくと動かしただが、声はなかった。その余裕もないらしい。額には珠の汗が浮かんでいる。

彼女はしばらく空気を求めて喘いでいた。だが、ややあつて。

「……死んだかと思った」

「大げさだな……と言いたところだが。その様子だと、相当痛かったみたいだな」

喋りながら心を落ち着け、ブラムはフレデリカの背中に腕を回した。繋がったまま抱き起こす。

そのまま抱き締めた。体の前面をびったりとくっつけ、掌で背中を撫でる。

「う、動いてもいいんだぞ？　ほら、なか腔内でびくびくしているし」

しばらく背中を愛撫していると、フレデリカが震える声で言った。ブラムはそれに、苦笑する。

「俺より自分の心配をしろ。声が泣きそうじゃねえか。」

……いいんだよ。今日はここまでだ。真実君をモノにした――まずはそれでいい」

「し、しかし……」

フレデリカはなおも食い下がろうとした。と、その時。

「では、こういうのはどうでしょう」

これまで状況を傍観していたイレエネが、唐突に口を挟んだ。それからフレデリカの背後に回り、後ろから抱きとめるような格好になる。

「……イ、イレエネ殿？」

困惑して、フレデリカ。イレエネはそれに、微笑して答えた。

「ごめんなさい。まさか生娘だとは思いませんでしたので。わかっていれば、もう少しマシな嫉け方をしたのです」

言いながら、イレエネはフレデリカの体の前面に手を伸ばした。そのまま汗に塗れた乳房を揉み、乳首をそつと指先で弾く。

「あ……」

びくんと、フレデリカの体が震えた。繋がっている男根にも、膣^{なか}内の蠢^{うご}きが伝わってくる。

「お詫びと言ってはなんですが、お手伝いしましょう。大丈夫。破瓜の痛みはなくなるとも、気持ちいい感覚がまったくないわけでもないのです。せっかく男に抱かれるのですから、少しはその愉しさを知ってください」

イレエネは言いながらも、手は止めていなかった。乳房だけではなく、鎖骨や臍、腋などにも手を伸ばして愛撫していく。フレデリカは困惑しつつも、その繊細な指の動きに徐々に甘い声を漏らし始めた。

——そんな中で。ブラムはふと、イレエネからアイコンタクトを送られた。意図はなんとなくわかった。苦笑して、フレデリカの唇を奪いにかかる。

「あ、ブラム……んん……ん、む……」

舌は絡めたが、激しい口づけではなかった。水を徐々に溶かすように、少しずつフレデリカを蕩かしていく。しばらくして唇を離すと、彼女は舐を下げたメスの顔をしていた。

そしてそのタイミングで、イレエネの愛撫が次の段階に進んだ。指先がそつと、フレデリカの陰核に向かう。皮は剥かないまま、上から優しく撫で回されていく。

元より少し大きめで、弄りやすいフレデリカの女の弱点。それはこんな状況であつても、少しずつ彼女の体を火照らせていく。

「ふあ……あ、んっ……んんっ」

甘い呻きが聞こえた。膣^{なか}内に残る破瓜の痛みとは別に、陰核による官能の炎がしっかりと灯ったのだらう。それはフレデリカの体をどんどん赤くさせていき、やがて痛みと混ざり合つて不可思議な感覚を彼女に与えた。

「あ、ああ……イレエネ殿、それ、ダメだ……。ダメ、ダメだ……」

痛みと性感が同時に襲ってくるという初めての感覚に、フレデリカは呻いていた。なにがダメなのか、恐らく自分でもわかっていないまま繰り返している。「——ダメ？ そんなに声が蕩けているのに？ 嘘は



いけませんよ、フレデリカさん」

イレエネはやや白々しく言って、フレデリカの陰核をくにくにと皮ごと揉んだ。フレデリカはまた甘い声を漏らし、びくびくと肩を震わせる。

「ほら、どんな顔が可愛くなっていますよ。……彼に見せてあげるといいです」

イレエネがフレデリカの耳元で囁いた。するとフレデリカは、恥じ入るように首を横に振った。

「み、見ないで……」

薄っぺらな拒絶だった。当然、ブラムにそんなものは通じない。

「いい顔だ、フレデリカ」

意地の悪い笑みなど浮かべて、彼はフレデリカの目を見つめた。

「うう……味方がいない……」

フレデリカは泣きそうな声で呻いた。

——そして、その瞬間。

「いんです」

と、イレエネがブラムに向かってぼそりと告げた。

ブラムは頷いて、不自由な体勢からぐくゆつくりと腰を動かし始めた。上下にはなく、前後に揺するよう

に。

「んっ……うあつ!? な、膣内^{なか}が、押される……!」

「ええ。それが、この人の雄の部分です。どうですか? あなたの雌の部分は、しっかりそれを味わえていますか?」

「……あ、ああ……まだ痛いけど……少しか、気持ち、いい……」

フレデリカは言って、目を閉じた。官能に集中するように。あるいは、こうなったら楽しんだ方が楽だと開き直ったか。

それを見て取って、ブラムは少しか腰の動きを強めた。射精のための動き。

イレエネの愛撫で誤魔化しているとはいえ、あまり長く繋がるのは酷だという判断だった。そろそろ、終わらせてやるべきだろう。

「……射精^{せきしつ}るぞ」

不自由な体勢なので、少し手間取ったが——どうに

か射精感に手をかけた。ぐりぐりとフレデリカの奥を
いじめながら、告げる。

「初めてだと少しショックだろうが——受け止める」
「……っ」

フレデリカはそれに、息を詰めながらもこくりと頷
き——そして。

ブラムは制御していた射精感を解き放った。男根が
ひとつ大きく脈打ち、それを皮切りに白濁が迸る。ほ
んの少し前まで無垢だった膣^な内^かが、熱い精に蹂躪され
ていく。

「うあっ……あ、あああっ」

フレデリカは叫びながら、膣^な内^かを染められる感覚に
打ち震えた。そしてそれを追い打つように、イレエネ
がフレデリカの陰核をきゅっと摘む。すると——

「く、ひいつ!」

いっそう膣^な内^かを蠢かせて、フレデリカが仰け反った。
絶頂とまではいかなくとも、鋭い官能を得たのだろう。
すると彼女はもう、体の置き場所にも困ったようだった。
イレエネを振りほどく勢いで、思い切りブラムに

しがみついていた。受け止めたが、あまりの勢いに押し
倒される形になる。

フレデリカはそのまま、覆い被さるようにしてこちら
の唇を奪ってきた。なんというか、やけくそ気味では
あった。

なんにしろ、ブラムはこれも受け止めた。先ほどよ
りも荒っぽい舌使いで応じてやる。

くちゅくちゅと卑猥な音が鳴り、唾液が混じった。
それはやがてふたりの口から零れ落ちていく。口の周
りがべたべたになった。だがふたりとも、気にもしな
かった。元より汗だけで、しかもここは風呂場だ。い
くら汚れようと構いはしない。

体の深いところで繋がったまま、ふたりはしばらく
そうしていた。だが、やがて。

「……はあ、はあっ……」

加減のない口づけで息を切らしたフレデリカが、ふ
らりとブラムの体から身を引いた。ずるりと男根が抜
ける。すると栓が抜けた形になり、フレデリカの秘所
から赤色の混じったブラムの精が、どろりと顔を見せ

た。

「……あ、これ……」

絶え間なく零れ落ちてくる白濁を見下ろし、フレデリカは瞬きした。

「……そうか。わたし、ブラムの女になったのか」

「ああ、そうだな」

ブラムは身を起こすと、頷いた。すると彼女はふつと微笑して、告げてくる。

「……不思議だ。あんなに痛かったのに、いまはどこか幸せな気さえする。これが、女になるということなのか」

「さてな。そればかりは、俺にはわかんねえ」

「それもそうか」

言つて、フレデリカはまた笑った。と、その直後。彼女はふとなにかに気づいたように、こちらを見た。

「……お前、それ……」

視線の先には、まだ暴れ足りないのとばかりにそそり勃っているブラムの男根があった。彼女は流石に、やや呆れたような口調になる。

「英雄色を好むとは言うが……二回射精して、まだそんななのか。……なるほど、イレエネ殿が苦勞するわけだ」

彼女はひとり納得したように頷くと、今度は困ったように呟いてくる。

「その……もう一回、するか？」

「やめとけよ。破瓜に限らず、慣れないことは体に負担がかかる。やせ我慢が悪だとは言わないが、ここは意地を張る場面じゃねえだろ。……ま、気持ちはありがたいが」

告げて、フレデリカの頭を撫でる。彼女は満更でもない顔になったが、それでも食い下がってきた。

「しかし、これほど張り詰めていると……む。そうだ」

と、フレデリカはなにか思いついたように、ぽんと手を打った。それから彼女には珍しい、にやりとした笑みを浮かべてくる。

「——ここはひとつ、先輩の手管を見学するというのはどうだろう」

「え？」

——と。

しばらく傍觀者の立場でのほほんとしていたイレエネが、不意を突かれたような声をあげた。だがフレデリカは構わず続けた。

「わたしはもう限界だが——ほら、ご主人様がこんな調子だろう。これでは忍びない。不出来な後輩で申し訳ないのだが……あとを頼めないだろうか、イレエネ先輩？」

「え、あの。フレデリカさん？」

イレエネがじりじりと後退しつつ呟いた。こちらも珍しく、ややうろたえている。

それにブラムはほほうと呟き、フレデリカと同じくにやりと笑った。

「——そうだな。部下の不始末は上司の、後輩の粗相は先輩の責任だ。そこんとこどう思う？ イレエネ」

悪ノリではあった。論も適当極まるものである。しかし、フレデリカとふたりしてじつと見つめていると

「……私としたことが。のんびりしないで逃げるべ

きでした……」

イレエネは諦めたように嘆息して、小さく肩を落とした。



「……では、どういたしましょうか」

イレエネは意地の悪い笑みを浮かべたブラムとフレデリカに見つめられ、色々なことを諦めつつ言つた。するとブラムは、ふむと呟いて腕組みなどする。

「そうだな。フレデリカ、君はどうするのがいいと思う？」

「わたしが決めていいのか？ ふうむ、そうだな……」
フレデリカはきょとんと聞き返してから、ブラムと同じように腕組みをした。

（素っ裸で並んで、なにをしているのやら……）
思うが、口にはしなかった。余計なことを言うともつとろくでもない状況になりかねないからだ。

「……よし、ではこういうのはどうだろう。イレエネ殿。こちらへ」

フレデリカはなにか思いついたらしく、イレエネの

手を引いた。逆らえる状況ではないので素直についていくと、壁際に誘われる。

それから彼女は言ってきた。

「ここに手をついてくれ。こう……お尻を突き出す感じで」

言われるままに、壁に手をついて尻を突き出した。そしてそうなるから、イレエネはぼやいた。

「……この体勢……後ろから、ということですか」

「ああ。挿入^{はい}しているところが、これだとよく見えるだろう。自分がされていると、俯瞰する余裕などなさそうだからな。この機会に勉強させてもらおう」

「破瓜のあとだというのに、案外元気ですね……」

どこか楽しそうなフレデリカの様子に、ぐったりと呟く。すると彼女は、ブラムには聞こえないようにするのためか、こっそりと耳打ちしてきた。

「……イレエネ殿の指は、確かに気持ちよかったが。同じくらい、恥ずかしかったのだ。だからな、これはちよつとしたお返しだ」

悪戯を目論む子供のような声だった。彼女はくすく

すと笑って、続けてくる。

「しかし、まあ。イレエネ殿の気概なら、このくらいは平気だろう。性技に関してえらく達者なようだし」

「……………」

イレエネはふと、返事に詰まった。実のところ、いまの状況が恥ずかしいかと言えば、そんなことはまったくない。というより、イレエネはそもそも羞恥を超越した精神など持った覚えはなかった。表情に出にくい性質^{たち}なのと、男女の営みに関して一定の自信があるので、なんとなく平然として見えるだけだ。

つまりとところ……この後ろの穴まで晒したどうしようもなく無防備な格好は、イレエネとて結構恥ずかしいのだった。

だが――

「……まあ、そうですね。問題はありません」

(……ああ、中途半端な見栄が恨めしい)

思わず言ってしまったから大いに後悔し、イレエネはそつと嘆息した。

と、そうこうしているうちに。

「……そろそろいいか？」

ブラムが言つて、イレエネの秘所に男根を押し付けてきた。既に二度射精しているというのに、十分に上に怒張している。

（……まったく、節操のない……）

思うが、やはり口にはしなかった。このぼやきには、既に見えている切り返しがある。

ブラムの男根が颯るように撫でてきている彼女の秘所は、もう濡れていたのだ。他人の欲情をどうこう言える状態ではなかった。

だからイレエネは、もう一度だけ嘆息した。もはや退路はない。この恥ずかしい体勢で、しかもフレデリカの前で乱されることを受け入れるしかなかった。

「……いつでもどうぞ」

告げると、背後でブラムが動いたのが気配で知れた。腰が掴まれ、いよいよ本当に逃げられないようにされる。

そして次の瞬間には――

「はあ。あ、あああつ」

――彼の男根が容赦なく、イレエネの腔内^{なか}に入ってきた。

「あ、くうん……いきなり、奥まで……！」

甘い声を漏らし、イレエネは仰け反った。ブラムの男根を受け入れるのはもう慣れたことのはずだったが――だからといって、反応を止めることはできなかった。

「相変わらず締まるな、君の腔内^{なか}は」

呟きながら、ブラムが挿入を開始した。ゆっくりと男根が引き抜かれ、かと思えば最奥まで一気に突き込んでくる。

カリの返しに腔内^{なか}を揺られ、一番弱い奥の壁を突かれる。それがゆつくりと、しかし確かな力で延々と繰り返された。

「あうつ、うああつ。ひつ、くう……！」

イレエネの嬌声に混じって、肉を打ちつけ合う音が浴場に響いた。単純な挿入だが、体勢上繋がりが深く、襲ってくる官能は鮮烈だ。イレエネは早くも膝を震わせて、じわじわと内股になっていく。すると腔内^{なか}の締

まりにも変化があつたのか、ブラムがうお、と叫いた。

「……危ねえ。三回目だつてのに、暴発するかと思つたぜ」

彼は苦笑混じりに呟いて、抽挿を一度止めた。それから、最奥まで男根を押し込んでくる。股間が密着するほどの深い挿入。鋭い性感ではないが、これはこれで堪える状態だつた。

「……凄いな。慣れた者同士だと、こんな感じなのか」

間近でこの交わりを観察していたフレデリカが、ごくりと生唾など飲みながら言ってきた。だが、イレエネにはそれに反応する余裕などない。膝から崩れ落ちないように踏ん張るのがやつとだつた。

「——いや、見物なのはこつからだぜ」

ブラムがなにやら不吉なことを言つた。背筋にぞくりとしたものが走る。これは間違ひなく、ろくでもないことを考えている声だ——思うが、もう遅かつた。次の瞬間には、ブラムは行動を開始していた。

彼はイレエネの尻を鷲掴みにすると、ぐいと横に割り開いたのだ。すると当然、逃げ場のない恥ずかしい

穴——菊門が、どうしようもなく晒される。

「……ブラム様、お戯れがすぎますよ……!」

無駄だと知りつつも、イレエネは呟いた。だがやはりというかなんというか、ブラムはまるでこたえた様子もない。それどころか、気楽な声で注釈など挟み始めた。

「よく見てろよ。こうして奥までぶち込んでから、角度をつけると……」

彼は言いながら、イレエネの膣内^{なか}に完全にはまり込んでいる男根を、さらに押し込んできた。上に——つまりは背中側の壁に、龟头をぐりぐりと押し付けてくる。その激しくはないが確実な刺激の変化に、イレエネの体は即座に反応してしまふ。

「あ、やあ、ん……」

体が意図せず、ぴくりと震えた。そして、どうにか刺激に耐えようとした結果——

「……おお。お尻の穴がきゆうとなつた。凄いな。ひくひくしていて、こう言つてはなんだがとても卑猥だ……」

と、フレデリカが頼んでもいないのに、イレエネの変化を事細かに口にした。これには流石の床上手もふるふると震えて羞恥に打ちひしがれた。魔族の象徴たる長い耳が、先まで真っ赤になる。

「ば、馬鹿なんですか？ 破瓜を済ませたばかりの娘に、なにを教えているのです」

「その小娘の陰核を捻って悶えさせていたのは、さて誰だったかね？」

苦し紛れの言葉も、あえなく切り返される。そして、イレエネの受難はこれだけではなかった。

「……なあ、ブラム。これ……触つてもいいかな」

「……………え？ フレデリカ、さん？」

イレエネはぞつとして、思わず呻いた。だが事態は、イレエネの困惑など勘定に入れてくれなかった。ブラムは苦笑しつつ、しかし断固とした口調で告げた。

「いいぞ。俺が許す。ただし優しくな。その方が、彼女が好む刺激になる」

「わかった」

背後のふたりは、当の本人たるイレエネを放置して、

そんなやりとりをした。そして、次の瞬間。

「つ、ひあつ。あ、フ、フレデリカさんつ。それは、やめて……！」

菊門に襲いかかってくるもどかしい刺激——指で撫でられる感触に、イレエネは悶えた。これまでも十分に乱れている自覚があったが、これは本当に素の反応だった。

イレエネは特別、後ろの穴を弄られるのが好きかわけではなかったが——恥ずかしいという感情は、彼女を最も昂らせる要因だった。そして本来人目に触れることすらない穴を撫でられている状況は、無論のこと恥ずかしい。それも目一杯にだ。結果として、イレエネはがくがくと膝を震わせてしまった。

その恥辱とも言える責めは、しばらくの間続いた。イレエネは段々と力が抜けて立つていられなくなり——少しずつ崩れ落ちていく。

「……そうか。イレエネ殿はお尻も気持ちいいのだな。では、もつとしつかりと……」

と、フレデリカはそんなことを言った。らしくない

といえばらしくない物言い。しかしよくよく考えれば、そもそも彼女がここに留まることになった一件の中で、このような態度の片鱗を見せてはいた。

（ああもう。味方を増やすつもりだったのが、完全に裏目です……）

呟いている間に、イレレーネは床に這いつくばって尻を上げるような体勢になった。当たり前だが、これも非常に恥ずかしい格好だった。

しかもそんなになつても、与えられる刺激は変わっていないかった。ブラムは超人的な足腰の強さを無駄遣いして、挿入を保ったままにしていたのだ。さらにフレデリカも、律儀にイレレーネの菊門を追って、指を這わせてきている。

（こ、このコンビ……予想以上に面倒！）

呻くが、もうどうしようもなかった。ブラムは犬のような体勢となったイレレーネの腰を、がっちりと掴み直している。激しい抽挿の前触れ——止めを刺す準備段階だ。

「はは。しっかりと反撃されちゃったな。ま、この借り

はいずれまた、君自身でフレデリカに返してやるという」

「……あれ？　なんでわたしだけ？」

ブラムとフレデリカはそんなことを言い合いつつも、いよいよこちらを追いつめてきた。体を貫き通されるような強い抽挿と、あくまで優しい菊門への愛撫。それらが同時に、かつ絡み合つて襲ってくる。

「やつ。あ、ああああっ！　あん、ん、んんっ！　ひあ、ああんっ！」

仰け反り、恥ずかしい声を張り上げて。イレレーネは絶頂の淵にまで追いやられた。あとはもう、ほんの少しの力で背中を押されれば、ぼっかり開いた官能の埒場に真つ逆さまだ。

と、まさにその瞬間だった。

激しい抽挿の動きによって、ずれてしまったフレデリカの指。それが図ったように、思い切りイレレーネの菊門の中心に向かっていったのだ。すると……まあ当然の流れとして。

「ひいっ!?　そ、それダメえ！」



つぷりとフレデリカの指が第一関節ほどまで、イレエネの恥ずかしい穴の中に埋め込まれてしまった。そして、それが止めにもなった。

「いく……！ イク！ あ、あああああつ！」

絶叫し、イレエネはがくがくと全身で震えた。予感していた官能の坩堝に、頭から放り込まれる。

するとそれに反応して、イレエネは腔内を猛烈に蠢かせてしまった。技能というより雌として当然の反応として、ブラムの男根を徹底的に扱っていく。

「う、おっ。こいつは——駄目だ、もう止まらん。このまま射精すぞ！」

言葉が早いか射精が早いか、という状態で、ブラムは絶頂の最中にいるイレエネの腔内に、思い切り射精してきた。三度目だというのに、子宮まで直にぶつ叩くような勢이었다。

「あうっ。うう、はあああつ！」

熱い进りに追い打たれ、イレエネはまた震えた。菊門でフレデリカの指をぎゅうぎゅうと締めつけ、口の端からは涎すら零し——ここ最近でも、最も派手にイ

ってしまっていた。

その圧倒的な波が去るのに、一分以上は要した。イレエネは肩で息をしながら、ぐったりと浴場の床に横たわる。

「……えぐい射精だったな。流石に、俺のきかん坊も寝付いたようだ」

くだらないことを言いながら、ブラムが男根を引き抜いた。同時に菊門の圧迫——フレデリカの指も抜ける。

ようやく体を燃やす官能から解放されて、イレエネはふらふらと視線を彷徨わせた。

「イレエネ」

と、ふと優しい声が聞こえた。ぼんやりとしたまま声の方を向くと、ブラムに抱き寄せられた。さらに背中を撫でられる。心地いい刺激だった。

（……ああもう。これだからこの人は）

撫でられるごとに、辱められたような感覚が薄れていく。ただの情事だったように思えてくる。無論、それは錯覚というか、丸め込まれているだけだ。なん

にしろ大きな手が背中を撫でる感覚には逆らいがたく、イレーネはそっと嘆息した。

それから、彼女はついと視線を上げた。所在なさげに立っているフレデリカに告げる。

「……フレデリカさん。これでたぶん、わかったと思います……この人はこういう感じですよ。毎回。ええ、毎回こんな感じなんです。これからはあなたもその一部となります。気分はどうですか？ ハッピーですか？」

『次はあなたのお尻をいじめてあげます』と、暗に視線に込める。フレデリカはそれに、うぐと呻いて一歩下がった。

「……そ、その。お手柔らかに……」

「……ええ。それはもう。この手がふやけて柔らかくなるまで、じっくりたっぷりいじめてあげます」

「……ちよ、調子に乗りすぎたか……？」

フレデリカは頬を引きつらせた。なにをされるか想像したのである。

その姿に少しだけ溜飲を下げつつ。イレーネは今日何度目かの嘆息を、そっと呼気に混ぜ込んだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>